

# 大慧普覺禪師年譜の研究（上）

## 石井修道

### 凡例

一 原本および校合に使用したテキストおよび略号は次のとおり。

Ⓐ 宝祐元年刊行の宋版。立正大学図書館所蔵本。

Ⓑ 明藏所収本。中華大藏經第二輯第四冊。

Ⓒ 寛永廿年、沢田庄左衛門刊行。駒沢大学図書館所蔵本。

一 新字体にしたため、巳・巳・己や異体字、旧字体、俗字等は指摘しなかった。

一 (一) 内の本文中の数字は、原本の丁数を表わした。ⒶとⒸは、字数・丁数は同じだが、Ⓑは、割注が入った時に文字の移動がある外、十三丁より一行後にそれが生じている。

一 \*は、最後に示す注の箇所である。

祖謙。悚息上啓。大慧、入般涅槃、法門、山摧梁壞。四海道俗、失所師仰。自領遺問、私心慘怛。迨今未已、窃惟師資之重。其何以堪、此道墜地。任是責者、實在可庵。必將勉為衆出、繞仏慧命。固不可專於独善也。至禱至禱。」(1a)

杖錫今尚留塔下、或徑為歸福唐。計望一報益遠、道場敢異。以時珍重不宣。祖謙、悚息上啓。可庵禪師侍者祖謙。有少香燭、記賢公為爇於塔下。或賢公俱出煩可庵為爇之也。【祖謙】

(1b)

\*祖謙。悚息上啓す。大慧、般涅槃に入り、法門、山、摧き、梁、壞る。四海の道俗、師として仰ぐ所を失う。領してより間を遣し、私心に慘怛す。今に迨んで未だ已まず、窃かに師資の重きを惟う。其れ何を以つて堪ゆれば、此の道、地に墜ちん。是の責を任ず者、實に可庵に在り。必ず勉を將つて衆の為に出でて、仏の慧命を続ぐ。固より独善を専めにすべからず。至禱、至禱。

## 大慧禪師年譜序

禪人祖詠、編大慧禪師年譜。敬菴黃汝霖、以其先世入大慧室、求余為序。余曰、「雲駛月運、舟行岸移、編年雲也舟也月與岸。又在學人、高著眼」（2a）大慧之名、震天駭地、道伝其徒、徧滿天下、不待余序而後彰。余聞大慧嫡孫安永頌曰、何處覓行蹤、大地無寸土。敬以是題諸編年首。淳熙癸卯四月望日。蓮社居士張掄序。」（2b）

### \*大慧禪師年譜序

禪人祖詠、大慧禪師の年譜を編す。敬菴黃汝霖、其の先世、大慧の室に入るを以つて、余が序を為すことを求む。余が曰く、「雲駛せ、月運び、舟行き、岸移る。編年とは雲や舟や月と岸と。又在學人の高く眼を著け、大慧の名、天を震い、地を駭し、道、其の徒に伝え、徧く天下に満つ。余が序して而して後に彰さんことを待たず」。余、聞く、大慧の嫡孫、安永の頌に曰く、「何れの処にか行蹤を覗む、大地、寸土無し」。敬しく是を以つて諸編年の首に題す。淳熙癸卯（一一八三）、四月望日。蓮社居士、張掄序す。

### 大慧普覺禪師年譜

哲宗皇帝元祐四年己巳

師宣州寧國県人也。姓奚氏。其母初夢、神人衛一僧、黑頰而隆鼻、造于臥室、問其何所居。対曰、嶽北。覓而有娠、及誕之日、白光透室、拳邑歎異。実は年十一月初十日己時

也。按師答參政湯公致遠書云、大林嘉木、太半為國之棟梁。顧予樗散之材、分甘朽腐於陰壑。又按栢密樓公仲暉寄師詩云、昔年同与長風煙、別後生涯各信然。霜雪豈應摧操節、大林依舊勢參天。蓋二公皆同己巳也。又按示」（1a）吳景山偈、有己巳同庚大林木、甲乙丙丁馬与祿。今年太歲守未宮、指上輪來五十足。山僧自是出家兒、陰陽豈可全拘束之句云。

### ①太||大

哲宗皇帝元祐四（一一八九）年己巳。（一歳）。

師、宣州寧國県の人なり。姓は奚氏。其の母、初め夢む、神人、一僧を衛り、黒頰にして隆鼻なり、臥室に造る。其の何之所居なりと問う。対えて曰く、「嶽北」。覚めて娠むこと有り。誕るの日に及んで、白光、室を通り、邑を擧げて歎異す。実に是の年の十一月初十日の己の時なり。師の參政湯公致遠に答うる書を按するに云く、「大林嘉木、太半、國の棟梁」と為る。予を顧るに、樗散の材にして、甘を分つて陰壑に朽腐す。又、栢密樓公仲暉、師に寄するの詩を按するに云く、「昔年、同じく与に風煙に長る、別れて後、生涯、各おの信然たり。霜雪、豈に応に操節を摧くべ肯や。大林、旧に依つて、勢い天に参づるに、「己巳同庚、大林木、甲乙丙丁、馬と祿と。今年太歲守未の宮、指上輪來、五十足。山僧、是れより出家の兒、陰陽、豈に全く拘束すべ肯や」の句有りと云う。

五年庚午

五（一〇九〇）年庚午。（一歳）。

六年辛未

師三歳。按其家語、上祖光祿常示子孫云、昔漢于公為獄吏後曰、余理獄多陰德、子孫必有榮顯者。預高其門閭、庶以容車馬往來。吾建隆三年、預旨收河東、所至城邑、保護生靈、免塗炭者、不可以數計。後子孫當有享吾德者。及師三歲、其祖仲曰、光祿屢記子孫享其所積之德。今將百載、未見吾宗」（1b）有符其語者。余觀此子生吾家、神儀秀發、異事多顯。但恐世間富樂、不能羈絆耳。

六（一〇九一）年辛未。

師三歳。其の家語を按するに、上祖光祿、常に子孫に示して云く、「昔し漢の于公、獄吏と為りて後に曰く、『余、獄を理くに陰得多し。子孫必ず榮顯の者有らん。』預め其の門閭を高くせよ。庶くは以つて車馬の往来を容んことを』。吾、建隆三年（九六二）年、旨を預けて河東を収め、至る所の城邑、生靈を保護し、塗炭を免れしむる者、数を以つて計るべからず。後に子孫、當に吾が徳を享ける者有るべし」。師三歳に及んで、其の祖仲曰く、「光祿、屢しば子孫、其の積む所の徳を享くことを記す。今將に百歳ならんとするに、未だ吾が宗に其の語に符う者有るを見ず。余、此の子の吾が家に生るを観るに、神儀秀發にして、異事多く顯る。但だ恐らくは世間の富樂も、羈絆すことあたわざらんのみ」。

七年壬申

七（一〇九二）年壬申。（四歳）。

八年癸酉

八（一〇九三）年癸酉。（五歳）。

紹聖元年甲戌

紹聖元（一〇九四）年甲戌。（六歳）。

二年乙亥

師七歳。形体岐嶷、氣宇如神、不喜戯玩、語不妄發。羣兒皆畏之。有僧道至其家、即侍父側、客去記其談論、片言不遺。拳族異之。按普説云、余六七歳時、毎聞僧語、唯喜視聴。

二（一〇九五）年乙亥。

師七歳。形体岐嶷にして、氣宇、神の如く、戯玩を喜こばず、語、妄りに発せず。羣兒皆之を畏とす。僧有り、道、其の家に至る。即ち父の側に侍し、客去らば其の談論を記すこと、片言も遺さず。族を挙げて之を異とす。普説を按するに云く、「余、六七歳の時、僧の語を聞く毎に、唯だ視聽を喜ぶのみ」。

三年丙子」（2a）

三（一〇九六）年丙子。（八歳）。

四年丁丑

四（一〇九七）年丁丑。（九歳）。

元符元年戊寅

師十歳。師嘗謂侍者道先了徳曰、吾家因我生之後、家道日

微、及十歳、忽罹回祿、一夕蕩尽。父母以余命破祖業。親族間、以善財呼之。余雖心知其戲、实未審何等語。後因閱華嚴經、至入法界品、不覺失笑耳。

元符元（一〇九八）年戊寅。

師十歳。師、嘗て侍者道先了徳に謂つて曰く、「吾が家、因みに我が生るるの後、家道日に微ろう。十歳に及んで忽ち回祿に罹り、一夕に蕩尽す。父母、余の命を以つて、祖業を破る。親族の間、善財を以つて之を呼ぶ。余、心に其の戲を知ると雖も、實に未だ何等の語を審かにせず。後に因に華嚴經を閲て、入法界品に至つて、覚えず失笑するのみ」。

二年己卯

二（一〇九九）年己卯。（十一歳）。

三年庚辰

三（一一〇〇）年庚辰。（十二歳）。

徽宗皇帝建中靖国元年辛巳

師年十三。入郷校、十有三日、因与同窓戯、以硯投」（2 b）

之。誤中先生帽、償金三百而去。父責之。師曰、讀世間書、曷若究出世法。父曰、吾欲置兒於空寂中久矣。師願請行而母不允。

徽宗皇帝建中靖国元（一一〇一）年辛巳。

\*師、年十三。郷校に入りて、十有三日、因に同窓と戯れ、硯を以つて之を投ぐ。誤りて先生の帽に中る。金を償うこと三百にして去る。父、之を責む。師曰く、「世間の書を読んで、曷ぞ

出世の法を究むるに若かん」。父曰く、「吾、児を空寂の中に置かんと欲うこと久しう」。師、願くは行かんと請うも、母、允さず。

崇寧元年壬午

崇寧元（一一〇二）年壬午。（十四歳）。

二年癸未

二（一一〇三）年癸未。（十五歳）。

三年甲申

師年十六。父母知師無処俗意。遂令寓質県之西寺。未幾鄙所聞見、不就槽廠棄去。於是年九月、詣東山慧雲院、礼慧齊為師。按正統伝云、院先於元豐戊午、塑釈迦文像。有異人丁生、過焉語寺僧曰、今日立像、後當出一導師、大興宗教、照明濁世。然」（3 a）去此一紀方生。若像有難、是人始至、及像之毀、是人嬰禍。崇寧甲申、果有盜穴像之腹、取其所藏。齊、因追繹丁生之言謂、像有難而人至、符丁生之譏、非子而誰。因以宗杲名之。

三（一一〇四）年甲申。

師、年十六。父母、師の俗に処する意無きことを知る。遂に質を縣の西の寺に寓せしむ。未だ幾くならずして聞見する所を鄙んで、槽廠に就かず棄て去る。是の年の九月に、東山の慧雲院に詣でて、慧齊を礼して師と為す。正統伝を按するに云く、「院、先に元豐戊午（一一〇七）に、釈迦文の像を塑す。異人の丁生有り、焉を過ぎて寺僧に語つて曰く、『今日、像立つ。

後に當に一導師を出して、大いに宗教を興し、濁世を照明すべし。然して此を去ること一紀にして方に生ぜん。若し像、難有らば是の人始めて至り、像の毀つに及んで、是の人、禍に嬰わらん』。崇寧甲申（一一〇四）、果して盜有つて、像の腹を穴あけ、其の藏むる所を取る』。斎、因つて丁生が言を追繹して謂えらく、「像、難有りて人至る。丁生が讐に符う。子にあらずして誰ぞ」。因つて宗果を以つて之に名すべく。

#### 四年乙酉

師年十七。九月、納僧服。十月、請具足戒于景德寺。自爾智弁聰敏、不仮師承、日親禪學。按育王入院普說云、雖在村院、常買諸家語錄看、便喜雲門・睦州説話。又為慈明大師普說云、余十七歲、便知有宗門事。既落髮出去、礼拜善知識、惟恐這一件事不明了。異時撞入驢胎馬腹中去也。曾因看經、得』（3b）箇歎喜処。

#### 四（一一〇五）年乙酉。

師、年十七。九月、僧服を納む。十月、<sup>\*</sup>具足戒を景德寺に請う。しかしてより智弁、聰敏にして、師承を仮らず。日に禪學に親しむ。育王入院の普說を按するに云く、「村院に在ると雖も、常に諸家の語錄を買ひ見て、便ち雲門・睦州の説話を喜ぶ」。又、慈明大師の為の普說に云く、「余、十七歳にして便ち宗門の事有ることを知る。既に落髮出去して、善知識を礼拝して、惟だ這の一件の事の明了ならざることを恐るのみ。異時、驢胎馬腹の中に撞入し去れり。曾つて看經の因み、箇の歎喜の處を得たり」。

#### 五年丙戌

師十八歳。按為然侍者普說云、我初為僧、發蒙在奉聖初和尚出入室。教看僧問法眼、如何是學人自己。眼云、是汝自己話。初、嗣昌擔版。雲門下拳話、師家須提撕三五番、云是汝自己。是年離受業、述偈云、古仏放光留不住、鐵牛無脚也須行。雖然未踏曹谿路、且喜今朝離火坑。

#### 五（一一〇六）年丙戌。

師、十八歳。然侍者の為の普說を按するに云く、「我、初め僧と為り、蒙を発して、奉聖の初和尚の處に在りて入室す。僧、法眼に問う、『如何か是れ學人の自己』。眼云く、『是れ汝が自己』と云う話を看せしむ。初は昌擔版に嗣ぐ。雲門下の拳話、師家須く提撕すること三五番にして、是れ汝が自己と云うべし」。是の年、受業を離れ、偈を述べて云く、「古仏、光を放ち、留むとも住せず、鉄牛、脚無し、也<sup>\*</sup>た須く行くべし。未だ曹谿の路を踏まずと雖然も、且喜すらくは、今朝、火坑を離ることを」。

#### 大觀元年丁亥

師年十九。按為妙円居士普說、余十九歳、遊方尋知識。師初至太平州、遊隱靜杯渡菴。主僧迎待甚』（4a）厚。且顧伽藍神而言曰、昨宵將三鼓、夢此人告以今日雲峯悅禪師來。且戒其為侍耳。師謝不敏、及隱靜老宿以悅語為示、恍然過目成誦、終不忘。自此人謂是雲峯後身。按雲臥菴主書云、丙子秋、師於潯渚舟中、具言之、故詳載紀談。又按武

庫曰、武庫題篇之説。詳師初依瑞竹紹理和尚。乃琅邪<sup>①</sup>之的孫。因請益雪竇拈古・頌古、理令自見自説。師洞達微旨。理称

於衆曰『果必再来人也。又按為慈明大師普説云、昔在衆看玄沙語、見瑞巖喚主人公因縁、有歡喜處。遂詣理通消息、云云。是年秋、遊廬阜、而至郢州。』(4 b)

①邪=琊<sup>甲</sup>

大觀元(一一〇七)年丁亥。

師、年十九。<sup>\*</sup>妙円居士の為の普説を按するに(云く)、「余、十九歳にして遊方して、知識を尋ぬ」。「師、初め太平州に至り、隱靜杯渡菴に遊ぶ。主僧、迎待すること甚だ厚し。且つ伽藍神を顧みて言つて曰く、『昨宵、三鼓を將つて、夢に此の人、告ぐるに、今日、雲峰悅禪師来ると云うを以つてす。且つ戒、其の為に待つのみ』。師、不敏を謝して、隱靜の老宿の悦の語を以つて為に示すに及んで、恍然として目を過ぎ誦を成し、終に忘れず。此れより人謂えらく『是れ雲峰の後身なり』」。<sup>\*</sup>雲臥菴主の書を按するに云く、「丙子(一一五六)の秋、師、<sup>澤渚の</sup>舟中に於て、具に之を言う、故に詳しく紀談に載す」。又、武庫<sup>ハ</sup>武庫題篇の説、詳しく後の癸酉(一一五三)年に見ゆ<sup>ハ</sup>を按するに曰く、「師、初め瑞竹<sup>ハ</sup>紹理和尚に依る。乃ち琅邪の的孫なり。因に雪竇の拈古・頌古を請益す。理、自見自説せしむ。師、微旨に洞達す。理、衆に称して曰く、『果は必ず再来の人なり』」。又、慈明大師の為の普説を按するに云く、「昔、衆に在つて、玄沙の語を見るに、瑞巖、主人公を喚ぶの因縁を見て、歎喜の処有り。遂に理に詣でて消息を通す。云々」。是

の年の秋、廬阜に遊び、<sup>\*</sup>郢州に至る。

二年戊子

師二十歳。按為錢承務普説云、初行脚時、曾參洞山微禪師。二年之間、曹洞宗旨、一時參得。又按武庫曰、郢州大陽、見元首座・微和尚・堅首座。微在芙蓉楷会中、首衆。堅為侍者、十余年。師周旋三公座下、尽得其旨趣。於授受之際、皆臂香以表不妄付授。乃自惟曰、禪有伝授、豈仏祖自証自悟之法。遂棄之。又為方敷文普説云、微却有悟門、只是不合、將功勲五位・偏正回互・五王子之類、許多家事來伝。被我一伝得了、寫作一紙榜、在僧堂前。大丈夫參禪豈肯就宗師口邊、喫野狐涎睡。尽是閻老子」(5 a)面前、喫鉄棒底。

二(一一〇八)年戊子。

師、二十歳。<sup>\*</sup>錢承務の為の普説を按するに云く、「初め行脚の時、曾つて洞山微禪師に參す。二年の間、曹洞の宗旨、一時に參得す」。又、<sup>\*</sup>武庫を按するに曰く、「郢州の大陽にて、元首座・微和尚・堅首座に見ゆ。微、芙蓉楷の会中に在つて、衆に首たり。堅、侍者と為つて、十余年なり。師、三公の座下に周旋して、尽く其の旨趣を得たり。授受の際に、皆、臂香して、以つて妾りに付授せざることを表す。乃ち自ら惟<sup>ハ</sup>うて曰く、「禪に伝授有り。豈に仏祖、自証自悟の法ならんや」。遂に之を棄つ」。又、<sup>\*</sup>方敷文の為の普説に云く、「微、却つて悟門有るも、只だ是れ合せずして、功勲五位・偏正回互・五王子の類、

許多の家事を將ち來つて伝えしむ。我に一伝得了せられて、写して一紙の榜と作し、僧堂前に在り。大丈夫の參禪、豈に肯つて宗師の口辺に就いて、野狐の涎唾せんたを喫せんや。尽く是れ閻老子の面前に、鉄棒を喫する底ものなり」。

## 三年己丑

師二十一歳。按為真空道人普說云、山僧、大觀三年、至舒州、依海會從禪師。乃羅漢南公嗣子也。師未幾、至寶峯、挂搭、受宣州化主、十二月二十日、離泐潭。洞山廣和尚送師頌曰、果公化主化宣陽。彼處檀那尽吉祥。回復祖師堂上獻。生生世世永馨香。

## 三（一一〇九）年己丑。

師、二十一歳。真空道人の為の普說を按するに云く、「山僧、大觀三（一一〇九）年、<sup>\*</sup>舒州に至り、<sup>\*</sup>海會從禪師に依る。乃ち羅漢の南公の嗣子なり」。師、未だ幾くならざるに、<sup>\*</sup>宝峰に至りて挂搭し、<sup>\*</sup>宣州の化主を受け、十二月二十日、泐潭を離る。洞<sup>\*</sup>山廣和尚の師を送る頌に曰く、「果公化主、宣陽を化す。彼の處の檀那、尽く吉祥。祖師堂上に回復して獻ず、生生世世、永く馨香」。

## 四年庚寅

師二十二歳。持鉢宣州。按為然侍者普說、四月八日、遇奉聖初和尚上堂。問話畢。初、顧視笑曰、宝峯」（5b）化主、何不出来。我即出問、承和尚有言、金蓮從地湧、宝蓋自天垂。為復是神通妙用、為復是法爾如然。答曰、金蓮從

地湧、寶蓋自天垂。進云、鸞鳳不棲荆棘樹、燕雛猶恋旧時窠。答曰、三年不相見、便有許多般。進云、只如適來僧道、昔日世尊、今朝和尚、又作麼生。初、便喝。進云、這一喝、未有主在。初、回頭取挂杖稍遲。我便云、掣電之機、徒勞佇思。拍手一下帰衆。你看。我那時、何曾安排來。

## 四（一一〇）年庚寅。

師、二十二歳。宣州に持鉢す。然侍者の為の普說を按するに（云く）、「四月八日、<sup>\*</sup>奉聖初和尚の上堂に遇う。問話、畢る。初、顧視して笑って曰く、「宝峰の化主、何ぞ出来せざる」。我、即ち出でて問う、「<sup>\*</sup>承るに和尚、言えること有り、金蓮、地より湧き、寶蓋、天より垂る、と。為復、是れ神通妙用か。為復、是れ法爾如然か」。答えて曰く、「金蓮、地より湧き、寶蓋、天より垂る」。進みて云く、「<sup>\*</sup>鸞鳳、荆棘の樹に棲まず、燕雛、猶お旧時の窠を恋うるがごとし」。答えて曰く、「三年、相見せざるに、便ち許多般か有る」。進みて云く、「<sup>\*</sup>只如<sup>せき</sup>ば<sup>せき</sup>通來の僧の昔日の世尊、今朝の和尚と道う、又、作麼生」。初、便ち喝す。進みて云く、「這の一喝、未だ主有らず」。初、頭を回らして拄杖を取ること稍遲し。我、便ち云く、「掣電の機、徒に併思を労す」。手を拍つこと一下して衆に帰す。你、看よ、我、那時、何ぞ曾つて安排し來らん」。

## 政和元年辛卯

師二十三歳。持鉢宣州。師謂侍者曰、宝峯作<sup>①</sup>、以一年為限。余以目錄未遂、余八箇月、因館于兄之」（6a）家。一

日夜至五鼓、睡中見馬祖。喚云、起施主西門俟汝之久。師盥沐罷、將至奉聖寺前。偶邑人周節夫、与僕荷橐、而至於旅亭、少憩語次、詰師此行。師以實對。節夫乃邀、至其居、出橐金、以足目錄。津遣回山。乃是年八月也。後師兩住徑山、節夫往来無間。師待之甚厚。蓋不忘其往日之惠也。

(1)謂為甲

政和元(一一二一)年辛卯。

師二十三歲。宣州に持鉢す。<sup>\*</sup>師、侍者に謂つて曰く、「宝峰に丐を作すこと、一年を以つて限りと為す。余、目錄、未だ遂げず、八箇月を余すを以つて、因に兄の家に館す。一日、夜、五鼓に至り、睡中、馬祖に見ゆ。喚んで云く、『起きよ。施主、西門に汝を俟つこと久しう』。師、盥沐し罷つて、將に奉聖寺の前に至らんとす。偶たま邑人周節夫、僕と橐を荷つて、旅亭に至つて少く憩い、語る次、師の此の行を詰る。師、実を以つて対う。節夫、乃ち邀えて、其の居に至り、橐の金を出して、以つて目錄に足す。津遣して山に回る。乃ち是の年の八月なり。後に師、両び徑山に住す。節夫、往来、間無し。師、之を待すこと甚だ厚し。蓋し其の往日の恵みを忘れざればなり。

二年壬辰

師二十四歲。居侍者寮。按武庫曰、湛堂一日至寮、見看經次、乃問看甚經。對曰、金剛經。湛堂曰、是法平等、無有高下。為什麼雲居山高、寶峰山低。對曰、是法平等、無有

高下。湛堂曰、你做得箇座主使下。」(6b)一日侍次、湛堂視師指爪云、想東司頭籌子不是汝洗。師即承訓、交代黃竜忠道者、作淨頭、九箇月。按普說、某自聞湛堂和尚此說、終身不養爪甲。纔長一菽不剪。湛堂和尚、便於手指上出現。此乃誠服其訓導也。

二(一一二二)年壬辰。

師、二十四歲。侍者寮に居す。武庫を按するに曰く、「湛堂、一日、寮に至り、看經を見る次、乃ち問う、『甚の經をか看る』。対えて曰く、「金剛經」。湛堂曰く、「是の法、平等にして、高下有ること無し。什麼為に雲居山は高く、寶峰山は低し」。対えて曰く、「是の法、平等にして、高下有ること無し」。湛堂曰く、「你、箇の座主の使下と做り得たり」。一日、侍する次、湛堂、師の指の爪を視て云く、「東司頭の籌子、是れ汝が洗わざることを想う」。師、即ち訓を承けて、黃竜忠道者と交代して、淨頭と作ること九箇月なり。普說を按するに(云く)、「某し自ら湛堂和尚の此の説を聞き、終身、爪甲を養わず。纔に長きこと一菽、剪らず。湛堂和尚、便ち手指の上に出現す」。此れ乃ち誠に其の訓導に服するなり。

三年癸巳

師二十五歲。在淨頭寮。因書雲峯悅和尚小參語、於座右。

一日廣道者、至寮見之、乃私語湛堂曰、宣州果兄、以雲峯小參、為警慕、非碌碌余子之比。湛堂曰、此子佗日、必能任重致遠。是年八月、復帰侍者寮。」(7a)

三（一一三）年癸巳。

師、二十五歳。淨頭寮に在り。因<sup>\*</sup>に雲峰悅和尚の小参の語を座右に書す。一日、廣道者、寮に至つて之を見、乃ち私に湛堂に語つて曰く、「宣州果兄、雲峰の小参を以つて、警慕と為す。碌碌たる余子の比に非ず」。湛堂曰く、「此の子、佗日、必ず能く任重くとも遠きを致めん」。是の年の八月、復た侍者寮に帰る。

四年甲午

師二十六歳。一日、湛堂問曰、「你今日鼻孔、為什麼無了半邊。」對曰、「寶峯門下。」湛堂曰、「杜撰禪和。」又一日、於粧王處、問曰、「此官人姓什麼。」對曰、「姓梁。梁乃湛堂姓也。」湛堂以手自摩頭曰、「爭奈姓梁底少箇幞頭。」對曰、「頭雖不同、鼻孔髡鬚。」湛堂曰、「杜撰禪和。」又一日問曰、「果上座我這裏禪、你一時理會得。教你说也說得、教你做拈古・頌古・小參・普說、你也做得、只有一件事不是。你還知麼。」對曰、「什麼事某甲不知。」湛堂曰、「因、你欠這一解在。你不得這一解、我在方丈裏、与你说時、便有禪、纔出方丈、便無了。惺惺思量」（7b）時、便有禪、纔睡著時、便無了。若如此如何敵得生死。」對曰、「正是某甲疑處。」

①奈<sup>リ</sup>奈<sup>申</sup>。②③這<sup>リ</sup>者<sup>申</sup>

四（一一四）年甲午。

師、二十六歳。「<sup>\*</sup>」日、湛堂、問うて曰く、「你、今日、鼻孔、什麼為に半邊を了すること無きや。」對えて曰く、「寶峯の門下

五月乙未

り。」

師二十七歳。是年季夏、湛堂示微恙、及疾亟、師問曰、「和尚若不起此疾、教某甲依附誰、可以了大事。」湛堂良久乃曰、「有箇川勤、我亦不識佗、你若見佗、必能成就此事。」若見佗、了不得、便修行去、後世出來參禪。湛堂遷化後、其

なり。湛堂曰く、「杜撰<sup>する</sup>の禪和」。又、一日、十王<sup>を粧する</sup>し處に於て問うて曰く、「此の官人の姓は什麼ぞ。」對えて曰く、「姓は梁<sup>ハ</sup>梁<sup>\*</sup>とは乃ち湛堂の姓なり。」湛堂、手を以つて自ら頭を摩して曰く、「姓は梁なる底、箇の幞頭を欠くを争奈せん。」對えて曰く、「頭、同じからずと雖も、鼻孔、髡鬚たり。」湛堂曰く、「杜撰の禪和。」又、一日、問うて曰く、「果上座、我が這裏の禪を、你、一時に理會し得たり。你をして説かしむるも也た説き得、你をして拈古・頌古・小參・普説を做さしむるも你也た做し得ん。只だ一件の事のみ有りて不是なり。」

你、還つて知るや。」對えて曰く、「什麼の事か、某甲、知らず。」湛堂曰く、「因。你、這の一解を欠けり。你、這の一解を得ざれば、我、方丈の裏に、你的<sup>とま</sup>に説く時は、便ち禪有

り、纔に方丈を出ずれば、便ち無了ぬ。惺惺<sup>せきせき</sup>に思量する時、便ち禪有り。纔に睡著する時、便ち無了。若し此の如くなれば、如何が生死に敵得ん。」對えて曰く、「正しく是れ某甲が疑處な

り。」

平日説法・語要、不許抄録。太半師憶持誦出集成。攜謁洪覺範、以議編次。覺範題其後云、石門雲菴示衆之語、多脫窠臼。于時衲子視之、如春在花木、而不知其所從來。余每

謂、」(8a)此老人可以起臨濟之仆。哲人逝矣。切嗟悼之。  
以謂、世莫有嗣之者。湛堂於余為弟昆。自其開法、未嘗聞  
其挾揚、歿後百余日、得此錄於果上人處。讀之喟曰、雲菴  
余波、乃發生此老種性耶。按塔銘曰、政和乙未、七月二十  
二日、洪州寶峯住山準公、入滅闡維之、得五色舍利無數、  
目睛不壞、建塔于南山之陽。其徒志端・宗果、與同志李彭  
等、相與議曰、孰能銘吾師之塔。彭曰、無尽張公、於真淨  
父子、有大法緣。吾師行解相應、非張公之文、不足取信後  
世。衆中有可往見公者乎。彭願錄行狀以獻。師曰、某甲雖  
不識公、聞公家風、先行業而後機弁、願請」(8b)以行。

五(一一五)年乙未。

師、二十七歲。「是の年の季夏、湛堂、微恙を示す。疾亟かな  
るに及んで、師、問うて曰く、『和尚、若し此の疾を起さずん  
ば、某甲をして誰に依附して、以つて大事を了すべからしむ  
や』。湛堂、良久して乃ち曰く、『箇の川勤有り、我も亦た佗を  
識らず。你、若し佗に見えば、必ず能く此の事を成就せん。若

と莫し、と。湛堂、余と弟昆為り。其の開法より、未だ嘗つて  
其の挾揚を聞かず。歿後、百余日、此の錄を果上人の處に得  
て、之を読んで喟いて曰く、『雲菴の余波、乃ち此の老種性に  
発生するか』。塔銘を按するに曰く、「政和乙未(一一五)、  
七月二十二日、洪州寶峰の住山準公、入滅、闡維して五色の舍  
利無数を得たり。目睛、壞せず、塔を南山の陽に建つ」。其の  
徒、志端・宗果、同志李彭等と相い与に議して曰く、「孰が能  
く吾が師の塔に銘せん」。彭曰く、「無尽張公、真淨父子に大法  
縁有り。吾が師、行解相應して、張公の文に非ざれば、信を後  
世に取るに足らず。衆中、往きて公に見ゆべき者有るか。彭、  
願くは行狀を錄して以つて献ぜん」。師曰く、「某甲、公を識ら  
ずと雖も、公の家風を聞くに、行業を先として機弁を後にす。  
願くは請う以つて行んことを」。

六年丙申

師二十八歲。往兜率、求照禪師書、為紹介、之荆南、求塔  
銘於無尽居士丞相張公天寛。李商老以詩送師云、落絮霏霏  
攬客心。鳴鳩歷歷喚春陰。未於蓮社添宗炳、先向蘭亭減道  
林。遠嶠雲屯鍾磬晚、諸天日斷薜蘿深。詩緣病廢苦無思、  
為子送將聊一吟。相見次立而問曰、上人祇麼著草鞋遠來、  
曰、某、數千里行乞來、見相公。公曰、年多少。曰、二十一  
八。公曰、水牯牛年多少。曰、兩箇。公曰、什麼處學得這  
虛頭來。曰、今日親見相公。公笑曰、且坐喫茶。纔坐  
(9a)復問、遠來有何事。師趣前曰、泐潭準和尚、示寂茶  
の雲菴の示衆の語、多く窠臼を脱す。時に衲子、之を視て、春  
の花木に在るが如く、其の從來する所を知らず。余、毎に謂え  
らく、此の老人、以つて臨濟の仆を起すべし、と。哲人逝け  
り。切に之を嗟悼し、以つて謂えらく、世に之を嗣ぐ者有るこ

毗、目睛牙齒、數珠俱不壞、舍利無數。山中耆旧、皆欲相公大手筆作塔銘、激励後學。特特遠來、冒瀆鉤嚴。公曰、被罪于茲、未嘗為人做文字。今有一問、問上人、若道得、即做。若道不得、与錢五貫。裹足帰兜率、參禪去。曰、請相公問。公曰、聞準老眼睛不壞是否。曰、是。公曰、我不問這箇眼睛。曰、問什麼眼睛。公曰、問金剛眼睛。曰、若是金剛眼睛、在相公筆頭上。公曰、老夫為佗點出光明、令教照天照地去也。師復趨前曰、先師多幸、謝相公作塔銘。公笑而已。又問曰、汝草屨行乞數千里。通名以見余。爾師準」(9d) 吾知之久矣、爾不遠辛苦而來。於準亦有得乎。對曰、若有得、則不來見大丞相也。公曰、咄這掠虛漢。由是著之。其序略云、舍利、孔老之書、無聞也。先仏世尊滅度、弟子收舍利、起塔供養。趙州從諗舍利、多至萬粒。近世隆慶閑、百丈肅、煙氣所及、皆成舍利。大体出家人、本為生死大事。若生死到来、不知下落、即不如三家村裏省事漢、臨終付囑、一一分明。四大色身、諸緣假合。從本以來、舍利豈有體性。若其梵行精潔、白業堅固、虛明廓徹、預知報謝、不驚不怖、則依正二報、毫釐不失。世間癮心、於本分事上、十二時中、不曾照顧、微細流注、生大我慢。此」(10a) 是業主鬼、來借宅。如此而欲舍利流珠、諸根不壞、其可得乎。又按張德遠丞相作師塔銘曰、湛堂帰寂。師謁張公無尽、求準塔銘。無尽門庭、高天下少許可。見師一

言而契。下榻朝夕與語。號之曰妙喜。字之曰曇晦。師既歸以道路之艱、乃告於商老。<sup>(4)</sup> 商老作清餓賦、以戲師。商老與師最為莫逆。往來石門歐阜、追隨無間、以師乍急、因作佩韋賦、以贈之曰、李子囊有乍急疾、中歲少愈、夷粹自得。唯妙喜公、政爾無敵、拽斷鼻繩、因風奔逸、念佩韋之戒、作賦以勉之。曰、妙喜來前藥言甚力。吾嘗折肱泛濫。在昔邾子好潔、而廢於爐。魏妓授歌、而取誅殛。禰」(10b) 衡持桃杖、而大罵、周公出火攻、於下策。遠彥道、擲樗蒲而怒。王藍田、踐鷄子於屐。或逐繩而拔劍、或搗蜂而聚液。是皆喪天真於俄頃、蹈禍機於飄忽。妙喜於是開懷、以受尽言、止乎者也。三曰、此吾之三益。盍書之、以為吾盤盂机杖之銘乎。故李子夜呼燈醉索筆、為妙喜、三令五申之、而不惜也。李作此賦、乃是年六月二十五日夜也。

①鍾=鐘甲。②③這=者甲。④⑤⑥商=商鳳<sup>(2)</sup>。⑦者=是甲。⑧三=乃甲

### 六（一一六）年丙申

師、二十八歲。「<sup>\*</sup>兜率<sup>(1)</sup>に往きて、照禪師の書を求める、紹介と為して、<sup>\*</sup>荆南に之きて、塔銘を無尽居士丞相張公天覺に求む」。<sup>\*</sup>李商老、詩を以つて師を送つて云く、「落絮霏霏として客心を攬す。鳴鳩歴歴として春陰を喚ぶ。未だ蓮社に宗炳を添えず。先ず蘭亭に道林を減ず。遠嶠雲屯、鍾磬晚、諸天目断つて、薜蘿深し。詩縁病廢、苦、思い無し、子が為に送将して、聊か一吟す」。「相見の次、立ちどころに問うて曰く、『上人、祇<sup>(た)</sup>麼だ

草軒を著いて遠来すや。曰く、『某、數千里、行乞し來つて相公に見ゆ』。公曰く、『年、多少ぞ』。曰く、『二十八』。公曰く、『水牯牛の年、多少ぞ』。曰く、『両箇』。公曰く、『什麼処より這の虛頭を學得し来る』。曰く、『今日、親しく相公に見ゆ』。公笑つて曰く、『且く坐して喫茶せよ』。纔に坐して復た問う、『遠來して何の事か有らん』。師、趣かに前みて曰く、『泐潭準和尚、示寂し、荼毗するに、目睛・牙齒・数珠、俱に壞せず、舍利無数なり。山中の耆旧、皆相公の大手筆をもて塔銘を作して後学を激励せんと欲つす。特特として遠來して鉤巖を冒瀆す』。公曰く、『罪を茲に被つて、未だ嘗つて人の為に文字を做さず。今、一問有つて上人に問わん。若し道い得ば、即ち做さん。若し道い得んば、錢五貫を与えん。裏足して、兜率に帰つて、參禪去よ』。曰く、『請う、相公、問え』。公曰く、『聞く、準老の眼睛、壞せずと、是なるや』。曰く、『是なり』。公曰く、『我、這箇の眼睛を問わず』。曰く、『什麼の眼睛をか問う』。公曰く、『金剛の眼睛を問う』。曰く、『若是し金剛の眼睛ならば、相公の筆頭上に在り』。公曰く、『老夫、佗の為に光明を点出して、教をして天を照し地を照し去らしむ』。師、復た趣かに前みて曰く、『先師、多幸にして、相公の塔銘を作すを謝す』。公、笑うのみ。又、問うて曰く、『汝、草屨にて行乞すること數千里。名を通じて以て余に見ゆ。尔が師の準、吾、之を知ること久しう。尔、遠しとせずして辛苦して来る。準のところに於て、亦た得ること有るや』。対えて曰く、『若しこれこと有らば、則ち來つて大丞相に見えず』。公曰く、『咄。咄。咄。』。是に由つて之を著わす。其の序の略に云く、

「舍利は孔老の書に聞くこと無し。先仏世尊滅度して、弟子、舍利を收め、塔を起てて供養す。趙州從諗の舍利、多くして万粒に至る。近世、隆慶閑・百丈肅、煙氣の及ぶ所、皆、舍利と成る。大体、出家人、本より生死大事の為にす。若し生死到来して、下落を知らずんば、即ち三家村裏の省事の漢の臨終の付囑、一一分明なるに如かず。四大の色身、諸縁、仮りに合す。本より以来、舍利、豈に体性有らんや。若し其の梵行精潔にして、白業堅固に、虛明廓徹にして、預め報謝を知り、驚かず怖れずば、則ち依正二報、毫釐も失せず。世間の麤心、本分の事上に於て、十二時中、曾つて照顧せず。微細流注して、大我慢を生ず。此は是れ業主の鬼、來つて宅を借る。此の如くにして舍利流珠、諸根、壞せざることを欲わば、其れ得べけんや』。又、張徳遠丞相、師の塔銘を作すを按づるに曰く、「湛堂帰寂す。師、張公無尽に謁して、準の塔銘を求む。無尽の門庭、高くて、天下、許可するもの少し。師を見て、一言にして契い。榻を下つて朝夕与に語る。之を号して妙喜とい、之を字にして曇晦と曰う』。師、既に帰りて道路の艱を以つて、乃ち商老に告ぐ。商老、清餓の賦を作して、以つて師を戯る。商老、師と最も莫逆たり、石門、歐阜に往来して、追隨、間無し。師の卞急を以つて、因に佩韋の賦を作して、以つて之を贈りて曰く、「李子、曩に卞急の疾有り。中歳にして少く愈え、夷粹、自ら得たり。唯だ妙喜公のみ、政爾に敵無し。鼻繩を拽断して、風に因りて奔逸す。佩韋の戒を念つて、賦を作す。以つて之に勉めよ。曰く、妙喜、來前の藁言、甚だ力めよ。吾嘗つて脇を折り、泛濫たり。昔、邾子、好潔にして炉を廢す。魏妓、歌を授

けて誅殛ちゆうきょくを取る。禰衡ねいこう、桃杖とうじょうを持して大いに罵り、周公、火攻を出して、策を下す。袁彥道、樗蒲ちよを擲てきつて怒り、王藍田、

鷄子を屐に践む。或は蠅を逐うて劍を抜き、或は蜂を搗つつて液を聚む。是れ皆、天真を俄頃はるほに喪し、禍機を飄忽に蹈む。妙喜、是に於て、懷を開き、以つて尽言を受け、者を止めよ。三び曰く、「此に吾、之を三び益ますむ。盍し之を書して、以つて吾が盤盂机杖の銘と為せ。故に李子、夜、燈を呼び、酔うて筆を索め、妙喜が為に、之を三令五申して惜まさるなり」。李、此の賦を作すは、乃ち是の年の六月二十五日の夜なり。

七年丁酉

師二十九歳。是年、開大寧寬和尚語錄、求序於覺範。其略曰、余猶及見前輩能言、老黃龍同時所遊從。有若楊岐会・翠巖真・大寧寬、皆一時号明眼、而(11a)会・真所得法子、照映江左、語言布寰宇。獨寬公少見機縁。有石門宗果上人、抗志慕古、俊弁不羣。遍遊諸方、得此錄、讀之喜曰、雖無老成、尚有典刑。比語老成典刑也。其可使後學不聞乎。即唱衣鉢、從余求序。其所以命工刻之。嗚呼、果之嗜好、可謂、与世背馳。彼方尊事大名譽者、伝受其語、而果独取百年物故老僧之語、欲以誇学者、不亦迂乎。雖然会  
有賞音者耳。師在寶峯、雖未參得禪、先會汾陽十智同真、愛他面目現在。遂作頌云、兔角龜毛眼裏裁。鐵山當面勢崔嵬。東西南北無門入。曠劫無明當下灰。因舉似覺範。覺範

歎曰、作怪我二十年(11b)做工夫、也只道得到這裏。  
①這二者甲

七（一一七）年丁酉。

師、二十九歳。是の年、<sup>\*</sup>大寧寬和尚の語錄を開いて、序を覺範に求む。其の略に曰く、「余、猶お前輩の能言を見るに及んで、老黃龍の同時に遊從する所のごとし。楊岐会・翠巖真・大寧寬の若きは、皆、一時の明眼と号すこと有り。而れども会・真に得る所の法子、江左に照映し、語言は寰宇に布く。独り寬公のみ機縁を見ること少し。石門の宗果上人と云うもの有り、志を抗げ、古を慕い、俊弁、群ならず。遍く諸方に遊び、此の錄を得て、之を読みて喜んで曰く、「老成無しと雖も、尚お典刑有り。此の語、老成の典刑なり。其れ後学をして聞かざらしむべけんや」。即ち衣鉢を唱え、余に従つて序を求む。其れ工に命じて之を刻す所以なり。嗚呼、果の嗜好、謂いつべし、世と背馳せり。彼方の事大名譽の者、其の語を伝受するを尊ぶ。而れども果、独り、百年物故の老僧の語を取りて、以つて学者に誇らんと欲する者、亦た迂ゆえんまざらんや。然りと雖も会せば、賞音の者有らん」。師、宝峰に在りて、未だ禪に參得せずと雖も、先づ汾陽の十智同真を会して、他の面目的現在するを愛し、遂に頌を作して云く、「兔角龜毛、眼裏に裁ゆ。鐵山當面、勢なる崔嵬。東西南北、門入無し。曠劫の無明、當下に灰なり」。因みに覺範に舉似す。覺範、歎して曰く、「怪しみを作す、我、二十年、工夫を做す。也た只だ道い得て這裏に到る」。

八年戊戌

師三十歳。參潛菴源禪師、於予章之章江。按武庫曰、潛菴老

源和尚、退居章江。師參扣之久。一日、室中拳、僧在大愚會中、誦金剛經、至應如是知、如是見、如是信解、不生法相、驀然有省。遂白芝、通所悟。芝遽指禪牀前狗子云、狗子讐。僧無語。芝便打。即慈濟大師寶縁、與雲峯悅和尚厚善。奉勅住南華、嗣北塔祚和尚。潛菴拳前話、至不生法相處、芝云「狗子讐、你作麼生会」。師對曰、前話、至不生法相也。師後曰、大愚芝禪師、方便善巧、如珠走盤、不留影跡。今以實法與人、豈不孤」(12a) 仏祖之心乎。時請海會從禪師、住予章觀音。師以親近故、乃述疏云、道須神會、妙在心空。體之不眞於聰明、得之頓超於聞見。無容擬議、豈用提撕。長老從公、心契一如、道超三際。白雲巖畔、紅蓮已散於秋風。章水岸頭、玉蕊再敷於春色。念羣生之擾擾、嗟六趣之紛紛。背正投邪、迷源逐浪。不逢達士、誰挑暗室之燈。罕遇當人、孰指衣中之寶。願從勤請、無用勞謙。李商老、手錄之、仍題其後曰、妙喜為觀音、請竹靈叟疏、作語奇峭。若久致力於斯文者、乃知般若之靈驗如此。何必讀四庫書、然後為也。

①遽<sup>ハ</sup>遂<sup>申</sup>。②商<sup>ハ</sup>商<sup>圓</sup>。③奇<sup>ハ</sup>可<sup>圓</sup>

八（一一八）年戊戌。

師、三十歲。潛菴源禪師に予章の章江に參ず。武庫を按するに曰く、「潛菴源和尚、章江に退居す。師、參扣すること久しう。一日、室中に拳す。僧、大愚の会中に在つて、金剛經を誦す。『應如是知、如是見、如是信解、不生法相』と云うに至つて、驀然として省有り。遂に芝に白して所悟を通す。芝、遽<sup>ハ</sup>に禪牀

の前の狗子を指して云く、『狗子、讐』。僧、無語。芝、便ち打す。△即ち慈濟大師寶縁なり、北塔祚和尚に嗣ぐ。勅を奉じて南華に住す。雲峰悅和尚と厚善たりと。潛菴、前話を拳して、『不生法相の處に至つて、芝、狗子、讐と云う、你、作麼生か会す』。師、對えて曰く、『狗子』。潛菴、大いに之を称賞して謂く、『其れ不生法相なり』。師、後に曰く、『大愚芝禪師の方便善巧は、珠の盤を走るが如く、影跡を留めず。今、實法を以つて人に与えば、豈に仏祖の心に孤ならざらんや』。時に海會從禪師に請うて、予章の觀音に住せしむ。師、親近を以つての故に、乃ち疏を述べて云く、「道は神會を須い、妙は心空に在り。之を体めば、聰明を仮らず。之を得ば、頓に聞見を超ゆ。擬議を容ること無し。豈に提撕を用いんや。長老從公、心、一如に契い、道、三際を超ゆ。白雲の巖畔、紅蓮、已に秋風に散す。章水の岸頭、玉蕊、再び春色を敷く。羣生の擾擾を念じ、六趣の紛紛を嗟く。正に背きて邪に投じ、源に迷うて浪を逐う。達士に逢わざれば、誰か暗室の燈を挑げん。當人に遇うこと罕なり、孰れが衣中の宝を指さん。願くは勤請に從つて、勞謙を用いること無かれ』。李商老、手ら之を錄して、仍ち其の後に題して曰く、「妙喜、觀音の為に、竹靈叟を請うの疏、語を作すこと奇峭たり。久しく力を斯の文に致す者の若きは、乃ち知る、般若の靈驗、此の如きを。何ぞ必ずしも四庫の書を読みて、然して後に為さんや」。

宣和元年己亥」(12b)

一山院、以易冠裳、山中卒無布壳。遂以被单、製鶴筆。草堂和尚、時住黃竜。靈源和尚、退居昭默堂。江西法席、以此為冠。師三至山、靈源與語不倦。謂其徒曰、杲禪神、全似我晦堂老和尚。莫之挽留。乃作四頌、以贈師。期為叔世之舟筏。而屢造草堂室中。堂嘗曰、宣州杲兄、見地明白、出語超邁。乃吾家千里駒耳。因陞座次、師為衆請益、進語有云、拈得道旁芒草索、翻身擊碎鐵毬山之句、堂深喜之。時韓子蒼、宰分寧。洪覺範、寓雲巖。師与二」(13a)公、從遊久之。一日師作覺範頂相贊、有種空花抽暗楔之句。二公擊節、大稱賞之。按子蒼送師詩云、憶惜分寧日、逢師谿上頭。裁書訪彭沢、倚杖話荊州。時師得陳瑩中書、欲再往荊州、訪無尽居士。

## 二年庚子

師三十二歲。是年春、再謁無尽居士於荊渚。同唐子西、館于府第之西齋、為法喜之遊。一日、居士問曰、仏具正徧知、亦有漏網處。師曰、何謂也。居士曰、吾儒尚云、西方有大聖人、不治而不亂、不言而自化。然堯・舜・禹・湯、皆聖人也。仏何故略不言及之耶。師曰、且堯・舜・禹・湯、與梵王・帝釈、有優劣否。居士曰、」(13b)堯・舜・禹・湯、豈可比梵王・帝釈哉。師曰、仏以梵・釈、為凡夫。余可知矣。居士曰、何以知之。師曰、吾教備言、仏出、則梵王前引、帝釈後隨。居士擊節、以為高論。居士又一日、語師曰、余、頃在江寧戒壇院、寓居。再閱雪竇拈古、至百丈再參馬祖因緣。雪竇云、大冶精金、應無變色。投卷

の杲兄、見地、明白なり。語を出せば、超邁なり。」。乃ち吾が家の千里の駒のみ。因みに陞座の次、師、衆の為に請益し、進語して云うことあり、「道旁の芒草の索を拈得して、身を翻して鐵毬山を擊碎す」の句なり。堂、深く之を喜ぶ。時に韓子蒼、分寧を宰つかさどる。洪覺範、雲巖に寓す。師、二公と從遊すること久し。一日、師、覺範の頂相の贊を作す。「種空花、暗楔を抽く」の句有り。二公、節を擊つて、大いに之を称賞す。子蒼、師を送るの詩を按するに云く、「分寧の日を憶惜す、師に谿上の頭に逢う。書を裁いて彭沢を訪い、杖に倚つて荊州を話す」。△時に師、陳瑩中の書を得て、再び荊州に往きて、無尽居士を訪らわんと欲はす。△

①惜ハシメテ昔アラタニ甲イチ②

宣和元(一一九)年己亥。

師、三十一歳。兜率照禪師の席下に依る。嘗つて待者に語つて、「余、宣和改元(一一九)、二月、觀音より、竜安の兜率に往き、路中に至り、例經にて徳士に改む。遂に一山院に憩い、以つて冠裳を易え、山中、卒に布壳無し。遂に被单を以つて、鶴鑿つるくわを製す」。草堂和尚、時に黃竜に住す。靈源和尚、昭默堂に退居す。江西の法席、此を以つて冠と為す。師、三び山に至つて、靈源と与に語つて倦まず。其の徒に謂つて曰く、「杲の禪神、全く我が晦堂老和尚に似たり。之を挽留すること莫かれ」。乃ち四頌を作して以つて師に贈る。叔世の舟筏と為ることを期す。屢しば草堂の室中に造る。堂、嘗つて曰く、「宣州

曰、審如是。豈得有臨濟今日耶。遂有頌曰、馬師一喝大雄峯。深入觸體三日聾。黃檗聞之驚吐舌。江西從此立宗風。因拳似平禪師。平後致書云、去夏閱臨濟宗派、知居士得大機用。愍諸方學語之流、來求頌本乃成頌寄之曰、吐舌・耳聾師已曉。槌胸只得哭蒼天。盤山会裏翻筋」(14 a) 斗。到此方知普化顛。今又數年、諸方往往、以余聰明博記、少有知余者。公自江西法窟來、必弁優劣。試為老夫言之。師曰、居士見處、與真淨・死心符合。近世得此機用、獨二老矣。居士曰。真淨、何謂。師乃拳其頌云、客情步步隨人轉。有大威光不能現。突然一喝双耳聾。那吒眼開黃檗面。復舉死心拈提語云、雲巖敢問雪竇、既是大治精金、應無變色、為甚却三日耳聾。諸人要知麼。從前汗馬、無人識。只要重論蓋代功。居士躍然撫几曰、不因公語、爭見死心・真淨用處。若非二老、難顯雪竇・馬師。由是仰而歎、俯而悲。歎則歎二老与我同志。悲則悲真淨」(14 b) 已歿。而新老又不及識。慨然久之。乃述偈以示師云、馬師喝下立宗風。嗟我三人見處同。海上六鼈吞餌去。棲蘆誰更問漁翁。既而請違。無尽囑師曰、子必見圓悟。吾助子往。遂津致行李、來京師。師於是年十月、離渚宮。無尽、乃十一月薨。按唐立夫舍人書云、某宣和庚子同尊丈、居無尽書齋、及八箇月。從遊甚樂。因作京師之行。自茲分攜、遂成契闊。

曰、審如是。豈得有臨濟今日耶。遂有頌曰、馬師一喝大雄

二(一一一〇) 年庚子。

師、三十二歳。「是の年の春、再び無尽居士に荆渚に謁す。唐子西と同じく、府第の西斎に館し、法喜の遊と為す。一日、居士問うて曰く、「何の謂いや」。居士曰く、「吾が儒尚びて云く、西方に大聖人有り。治めずして乱れず、言わざして自ら化す。然も堯・舜・禹・湯、皆聖人なり、と。仏、何故に略るに言、之に及ばざらんや」。師曰く、「且く、堯・舜・禹・湯、豈に梵王・帝釈に比すべけんや」。師曰く、「仏、梵・釈を以つて凡夫と為す。余は知りぬべし」。居士曰く、「何を以つてか之を知る」。師曰く、「吾が教に備に言う、仏、出するときは則ち梵王前に引き、帝釈後に隨う」。居士、節を擊つて以つて高論と為す」。「居士、又、一日、師に語つて曰く、「余、頌ろ、江寧の戒壇院に寓居す。再び雪竇の拈古を聞るに、百丈、再び馬祖に參する因縁に至つて、雪竇云く、大治の精金、應に変色無かるべし」。卷を投じて、頌有りて曰く、「馬祖の一喝、大雄峯。深く觸體に入りて、三日襲す。黃檗、之を聞いて、驚ろいて舌を吐く。江西、此より宗風を立つ」。因みに平禪師に拳似す。平、後に書を致して云く、「去夏、臨濟宗派を閱て、居士の大機の用を得ることを知る」。諸方學語の流を愍みて、來つて頌本を求め、乃ち頌を成して之を寄せて曰く、「吐舌・耳聾、師已に曉らむ。胸を槌いて只だ蒼天と哭するを得。盤山の会裏に、筋斗を翻す。此に到つて方に知る、普化の顛と。今、又、數年、諸方往往に余の聰明博記を

以つて、余を知る者有ること少し。公、江西の法窟より來り、

必ず優劣を弁ぜん。試みに老夫が為に之を言え。師曰く、『居士の見處、真淨・死心と符合す。近世、此の機用を得るは、独り二老のみなり』。居士曰く、『真淨、何の謂いぞ』。師、乃ち其の頌を挙して云く、『客情、歩歩、人に隨つて転ず。大威光有り、現ること能わず。突然たる一喝、双耳、聾す。那吒の眼、開く、黃檗の面』。復た死心の拈提の語を挙して云く、『雲巖、敢えて雪竇に問う、既是に大治の精金、応に変色無かるべし。甚為に却つて三日耳聾す。諸人、知らんと要すや。従前の汗馬、人の識る無し。只だ重ねて蓋代の功を論することを要す』。居士、躍然として几を撫して曰く、『公の語に因らずんば、争か死心・真淨の用處を見ん。若し二老に非ずんば、雪竇・馬師を頤わすこと難し、是に由つて仰いで歎じ、俯して悲す。歎することは、則ち二老と我と志を同じきを歎じ、悲しむことは、則ち真淨の已に歿するを悲しむ。新老、又、識に及ばず。慨然として入し。乃ち偈を述べて以つて師に示して云く、『馬師の喝下、宗風を立つ。嗟、我、三人の見處、同じ。海上の六鼈、餌を呑み去る。蘆に棲む、誰か更に漁翁に問う』。既にして違わんことを請う』。「無尽、師に嘱して曰く、『子、必ず圓悟に見えよ。吾、子の往くを助く』。遂に津、行李を致し、京師に来る」。師、是の年の十月に、潛宮を離れ。無尽、乃ち十一月に薨背す。唐立夫舎人に与える書を按するに云く、「某、宣和庚子（一一二〇）、尊丈と同じく、無尽の書齋に居して、八箇月に及ぶ。遊びてより甚はだ楽しむ、因つて京師の行を作す。茲より分攜して、遂に契闊を成す」。

### 三年辛丑

師年三十三歳。按答閔無党書曰、伏自渚宮作別徧遊襄沔、取道南陽。以冬春雨雪連作、没溺道塗。」(15a) 其勞有不可勝言者。二月十七日、始至香巖、少此息肩。偶天寧老子、遣价相邀、既は道旧、初不苦辞。因卷械此來、作度夏計。

又按為鄭成忠普說云、山僧、往年行脚、將入京師、至鄧州天寧。有一蔡州道士。遣人至藏司、借華嚴・寶積二經。余窺知其為佳士。翌日、相見与語、果然符合也。

### 三（一一二一）年辛丑。

師、年三十三歳。閔無党に答える書を按するに曰く、「伏して渚宮に別れを作してより、徧く襄沔に遊び、道を南陽に取る。冬春の雨雪の連作を以つて、道塗に没溺す。其の勞、勝けて言うべからざる者有り。二月十七日、始めて香巖に至り、少しく此に肩を息む。偶たま天寧老子、介を遣し、相い邀う。既はに道旧、初め苦ろに辞せず。卷械、此に来るに因つて、夏を度る計を作す」。又、鄭成忠の為の普說を按するに云く、「山僧、往年、行脚して、將に京師に入らんとす。鄧州の天寧に至る。一年の蔡州の道士有り。人をして藏司に至らしむ。華嚴・寶積の二經を借る。余、窺に其の佳士為るを知る。翌日、相見して与に語るに、果然として符合す」。

### 四年壬寅

師三十四歳。初至京師。擬依法雲仏照果和尚会下。適仏照、退居景德鉄羅漢寺。躊躇<sup>①</sup>半月、未決去留。因追繹湛

堂遺訓。時仏果和尚、居蔣山、乃竟欲往焉。而同志勉之曰、江淮豈此老久留都下有」(15 b) 闕、必此來也。遂依咸平普融平禪師法席。按答王大受書云、密首座、某与渠同在普融會中、相聚、尽得其要領。一日、因上堂、謝知客有語云、三門頭忽有箇無面目漢來。又如何与伊相見。師乃問僧、今日和尚上堂、恁麼道、你作麼生会。不得道遠来不易、不得道且坐喫茶、不得道後架洗脚、不得道寮舍不便。你別著得甚語。僧無語。師乃舉似普融。融云、你離却作麼生与伊相見。師云、且坐喫茶。融云、我情知你跳不出。師云、和尚離却如何与伊相見。融云、且坐喫茶。師云、猶較些子。咸平乃太宰王公大觀功德寺。太宰往来無間、而独喜者。師頗無僞居意。太宰由是、以府第後花園、易菴、遷師居之。

①躊躇（すうしよ）

四（一一二二）年壬寅。

師、三十四歲。<sup>\*</sup>初めて京師に至る。法雲の仏照果和尚の会下に依らんと擬す。適たま仏照、景德の鐵羅漢寺に退居す。躊躇すること將に半月ならんとして、未だ去留を決せず。因みに湛堂の遺訓を追繹す。時に仏果和尚、蔣山に居す。乃ち竟に往かんと欲。而して同志、之を勉まして曰く、『江淮、豈に此の老、久留せんや。都下に闕有り。必ず此に來らん』。遂に咸平の普融平禪師の法席に依る。王大受に答うる書を按するに云く、

「密首座、某、渠と同じく普融の会中に相い聚り、尽く其の要領を得たり」。<sup>\*</sup>一日、因みに上堂して知客に謝して、語有りて云く、「三門頭に忽ち箇の無面目の漢有りて来る。又、如何が伊と相見せん」。師、乃ち僧に問う、「今日、和尚、上堂して恁麼く道う。你、作麼生が会す。遠来、易からずと道うことを得ず、且く坐して喫茶せよと道うことを得ず、後架に洗脚せよと道うことを得ず、寮舍に不便と道うことを得ず。你、別に甚の語をか著得けん」。僧、無語。師、乃ち普融に舉似す。融云く、「你、離却して作麼生が伊と相見せん」。師云く、「且く坐して喫茶せよ」。融云く、「我、情に知る、你、跳不出なることを」。師云く、「和尚、離却して如何が伊と相見せん」。融云く、「且く坐して喫茶せよ」。師云く、「猶お些子に較れり」。咸平は乃ち太宰王公の大觀功德寺なり。太宰、往来すること間無くして、独り師と談論することを喜ぶ。師の酬酢、主賓に闊略す。其の徒、陰忌の者有り。師、頗る僞居の意無し。太宰、是に由つて府第の後の花園を以つて菴に易え、師を遷して之に居せしむ。

五年癸卯

師三十五歲。居太宰菴。闕府敬事、過於所親四事豊羔、用適師意。菴中不事煙燬、二餚及賓客往還凡有所須、皆府中應給。既親以道。遂爾佚居。

五（一一二三）年癸卯。

師、三十五歲。<sup>\*</sup>太宰の菴に居す。闕府、事を敬い、親しくする所の四事、豊羔<sup>こ</sup>を過ぎるも、用いて師の意に適う。菴中、煙燬<sup>そん</sup>

を事とせず。二饋及び賓客の往還、凡そ所須有らば、皆、府中に給に応ず。既に親しくして道を以つてす。遂に専して佚居す。

## 六年甲辰

師三十六歳。九月圓悟有天寧之命、詔既下。乃私自慶曰、此老實天賜我也。幸早届都城、速慰所願、屢以湛堂無尽委寄之語。以白太宰、欲預往天寧、俟圓悟之來。其闔府挽留之意愈篤。乃密令僕役」(16 b) 移行李於宅庫、及圓悟將次國門。始託閔無党、私喻鑰吏、獨竊祠部而往。乃自惟曰、當以九夏為期。其禪若不異諸方、妄以余為是、我則造無禪論去也。謾自枉費精神、蹉跎歲月、不若弘一經一論、把本修行。庶他生後世、不失為仏法中人也。遂贖清涼華嚴疏鈔一部、齋之天寧。

## 六（一一四）年甲辰。

師、三十六歳。九月、圓悟、天寧の命有り、詔、既に下る。乃ち私に自ら慶んで曰く、「此の老、實に天、我に賜う」。幸いに早く都城に届る。速かに願う所を慰み、屢しば湛堂・無尽の委寄の語を以つてす。以つて太宰に白して、預め天寧に往きて、圓悟の来るを俟たんと欲う。其の闔府、挽留の意、愈いよ篤し、乃ち密かに僕役をして、行李を宅庫に移さしめ、圓悟の將に國門に次がんとするに及んで、始めて閔無党に託し、私かに鑰吏に喻し、独り竊かに祠部して往く。乃ち自ら惟うて曰く、「當に九夏を以つて期と為すべし。其の禪、若し諸方に異らずして、妄りに余を以つて是と為さば、我は則ち無禪論に造

り去らしむ。謾りに自ら枉しく精神を費やし、歲月に蹉跎するは、一經一論、把本修行を弘むるには若かず。庶わくは、他生後世、仏法中の人と為ることを失せざれ。遂に清涼の華嚴疏鈔一部を贖いて、之を天寧に齋す。

## 七年乙巳

師三十七歳。四月、抵天寧、挂搭。按為礼侍者普說云、五月十三日、因張康国夫人、請圓悟禪師陞座。拳、僧間雲門、如何是諸仏出身處。門云、東山水上行。若是天寧、即不然、如何是諸仏出身處、薰風自」(17 a) 南來、殿閣生微涼。向這裏、忽然前後際斷、雖然動相不生、却坐在淨倮倮處。入室次、圓悟曰、也不易你得到這箇田地。可惜死了不能得活、不疑語句是為大病。不見道、懸崖撒手、自肯承當、絕後再蘇、欺君不得。須信有這箇道理。遂令居沢木堂、作不釐務侍者。每日同士大夫入室。只舉有句無句如藤倚樹、纔開口便道、不是。如是將半年。一日同趙表之、方丈藥石次、把筋在手、忘了喫食。圓悟顧師、而語表之曰、這漢參得黃楊木禪也。師遂引狗看熱油鑑為喻。圓悟曰、只這便是金剛圈・栗棘蓬居無何。扣圓悟曰、聞和尚嘗問五祖此話。不知記其」(17 b) 答否。圓悟笑而已。師曰、若對人天衆前問、今豈無知者耶。圓悟乃曰、向問有句無句如藤倚樹時如何。祖曰、描也描不成、画也画不就。又問、忽遇樹倒藤枯時如何。祖曰、相隨來也。師聞拳乃抗声曰、某会

也。圓悟曰、只恐你透公案不得。云、請和尚舉。圓悟遂舉。師出語無滯。圓悟曰、今日方知、吾不汝欺也。遂著臨濟正宗記、以付之。俾掌記室、分座訓徒。師乃炷香為誓曰、寧以此身、代衆生、受地獄苦、終不以仏法、當人情。

乃握竹箋、為應機之器。於是声誉藪著、叢林咸歸重之。按圓悟跋示師法語後云、果首座、昔遊叢林、徧見大有道之士、軒昂騰踏、不」(18a)可羈縻。曾於渚宮、與無尽居士投契。公雅重其器、每囑曰、應須見仏果。宣和中、會余被旨、領天寧。渠即先一日入堂、已而造室中。發語果異。嘗陞座、舉諸仏出身處、薰風自南來、即大警然。自余命於方丈側、寅夕與之鍛煉。以白雲老師、昔所示有句無句。

渠尽伎倆、百種開展、悉列下、幾乎以為、心倖移換、初無實地。因志誠語之。昔仏鑑與余正興是謗、使更絕意探蹟、當不較多。後來驀然猛省、盡脫去機籌、知見玄妙。因為渠云、正好參禪也。即踴躍向前、從頭一一、加針錐、始浩然大徹。余不喜得人。但喜此正法眼藏有覲得透底、可以起臨濟正宗。遂」(18b)於稠人中指、令分座訓徒。久之會都下多故、理瓶錫出汴、臨分書此、以作別。間年余、自平江虎丘、得得上歐阜、再集。至山之次日、入首座寮。闔山数百衲子聳動。屢作師子吼、揭示室中金圈・栗蓬・大鉗鎚。本色久參之流、靡不欽服。而德性愈恬穩、洪無靜之風、帖帖不較勝負。只欲深藏山谷、倣古老火種刀耕、向鑊頭邊、收

拾攻苦食淡兄弟、木食澗飲、草衣茅舍、避世俟時清平、即發悲願。真大丈夫、慷慨英靈奇傑之人、所跔步。因再為細書。仍作是跋焉。又書送師持鉢頌後、果公妙喜、宣和末、投誠於天寧密室。四十二朝昏、而於一言之下、領略、尋掌」(19a)孟入塵市、發意甚銳。臨行作偈、以餞之。不惟以一期小緣、要欲結万人之志。洪荷此千二百斤擔子、既已了能事。即入記室、椎拏之下、訓徒、四方雲衲、駢臻。遽遭金人渝盟、彼彼拏衣出汴。相分歲華、聿会于雲居首衆、即持旧語、俾書之。按此二跋、師乃是四月初一日、挂搭、圓悟初二日、入院、五月十三日、悟道。自四月初一日、至五月十三、乃四十二日。悟道後、持鉢化緣畢、入書記寮明矣。

① 檜 = 担

七(一一二五)年乙巳。

師、三十七歳。四月、天寧に抵り、挂搭す。礼侍者の為の普説を按するに云く、「五月十三日、因みに張康国夫人、圓悟禪師を請うて陞座せしむ。舉す、『僧、雲門に問う、「如何なるか是れ諸仏出身の処』。門云く、「東山水上行」。若是し天寧ならば、即ち然らず、如何なるか是れ諸仏出身の処。薰風、南より來りて、殿閣に微涼を生ず』。這裏に忽然として前後際断す。然りと雖も、動相、生せず、却つて淨倮の処に坐在す。入室の次、圓悟曰く、「也た你、這箇の田地に到り得ること易からず。惜むべし、死了って活を得ること能わざることを。語句を

疑わざる、是れ大病と為す。道うを見ずや、懸崖に手を撒して、自ら肯つて承当す。絶後に再び鮓えらば、君を欺むこくを得ず、と。須く信すべし、這箇の道理有ることを』。遂に拝木堂に居せしめ、不釐務侍者と作る。毎日、士大夫と同じく入室す。只だ拳す、有句無句は、藤の樹に倚るが如し、と。纔に口を開けば便ち道う、『不是』と。是の如く將に半年ならんとす。一日、趙表之と同じく方丈にて薬石の次、筋を手に把つて食を喫することを忘了す。圓悟、師を顧みて表之に語つて曰く、『這の漢、黃楊木の禪に參得す』。師、遂に狗の熱油鑄を看よと云うを引いて喻と為す。圓悟曰く、『只だ這れ便ち是れ金剛圈・栗棘蓬に居すること何とすること無し』。圓悟を扣いて曰く、『和尚、嘗つて五祖に此の話を問うと聞く、知らず、其の答を記すや』。圓悟、笑うのみ。師曰く、『若し人天衆の前に対して問わば、今、豈に知者無からんや』。圓悟乃ち曰く、『向に問う、「有句無句は藤の樹に倚るが如き時、如何』。祖曰く、「描けども也た描くこと成らず、画けども也た画くこと就かず』。又、問う、「忽ち樹倒れ藤枯るに遇う時、如何』。祖曰く、「相い隨い来れり』。師、拳するを聞いて乃ち声を抗げて曰く、『某、会せり』。圓悟曰く、『只だ恐くは、你、公案を透ること得ざることを』。云く、『請う和尚、拳せよ』。圓悟、遂に拳す。師、語を出すに滞ること無し。圓悟曰く、『今日、方に知る、吾、你を欺かざることを』。遂に臨濟正宗記を著して、以つて之に付し、記室を掌らしめ、座を分つて徒を訓かしむ。師、乃ち香を炷いて為に誓つて曰く、「寧ろ此の身を以つて衆生に代つて地獄の苦を受くとも、終に仏法を以つて人情

に当らず』。乃ち竹籠を握つて応機の器を為す。是に於て、声誉、讌いに著き、叢林、咸なに帰重す。圓悟の師に示す法語の後に跋するを按するに云く、「果首座、昔、叢林に遊び、偏く大有道の士に見え、軒昂騰踏として、羈縻すべからず。曾つて渚宮に無尽居士と投契す。公、雅より其の器を重んじて、毎に嘱して曰く、『應須く仏果に見ゆべし』。宣和中、会たま余、旨を被つて天寧を領す。渠、即ち先に一日入堂し已る。而して室中に造る。語を發するに果して異なり。嘗つて陞座して、諸仏出身の処、薰風、南より來ると拳すに、即ち大いに警然たり。これより、方丈の側に命じて、寅夕に之と鍛煉す。白雲老師の昔、示す所の有句無句を以つて、渠、伎倆を尽して、百種に開展すれば、悉く列下、幾んど以為り、心、移換に倣い、初めより実地無し。因つて志誠に之を語る。昔、仏鑑、余が与に正に是の謗を興しき。更に意を絶し蹠を探らしめば、當に多に較べざるべし。後來、驀然として猛省して、尽く機籌を脱去して、知見、玄妙なり。因みに渠が為に云く、『正に好し參禪するに』。即ち踴躍して向前す、從頭に一一に針錐を加えて、始めて浩然として大徹す。余、人を得ることを喜ばず。但だ此の正法眼藏の観得透する底有つて、以つて臨濟の正宗を起すべきことを喜ぶ。遂に稠人の中に指して、座を分つて徒を訓かしむ。久しく述べて、稠人の中に指して、座を分つて徒を訓かしむ。遂に稠人の中に指して、座を分つて徒を訓かしむ。久しくして此を書し、以つて別と作す。年余を間てて、平江の虎丘より、得得として歐阜に上つて再び集る。山に至るの次の日、首座寮に入る。闡山数百の衲子、聳動す。屢しば師子吼を作して、室中の金圈・栗蓬の大鉗鎌を掲示す。本色久参の流、欽服

せざると云うこと靡<sup>な</sup>し。而も徳性、愈いよ恬穩にして、無諍の風を洪<sup>おほ</sup>し、怱怱として勝負を較らべず。只だ深く山谷に藏れ、古老的火種刀耕に倣い、鑊頭邊に、攻苦食淡の兄弟を收拾し、木食澗飲、草衣茅舎にして、世を避けて、時の清平ならんを俟<sup>\*</sup>つて、即ち悲願を發せんことを欲するのみ。真の大丈夫、慷慨英靈奇傑の人の跔歩する所なり。因つて再び為に細書して、仍ち是の跋を作る。又、師<sup>\*</sup>を送る持鉢の頃の後に書す、「果公妙喜、宣和の末、誠を天寧の密室に投じ、四十二朝昏、一言の下に領略す。尋いで盃を掌つて、市に入廬し、意を發すこと甚だ銳し。行に臨んで偈を作し、以つて之に餞す。惟だ一期の小縁を以つて、万人の志を結ばんと欲せんと要せざれ。此の千二百斤の擔子を洪荷して、既已に能事了れり。即ち記室に入り、椎払の下に、徒を訓<sup>みちび</sup>き、四方の雲衲、駢臻<sup>じんしん</sup>す。遽<sup>とわか</sup>に金人の盟を渝<sup>とごき</sup>うむ。此の二跋を按するに、師、乃ち是れ四月初一日に挂搭し、圓悟、初二日に入院し、五月十三日、悟道す。四月初一日より、五月十三に至るに、乃ち四十二日なり。悟道の後、持鉢化縁し畢<sup>まつ</sup>り、書記寮に入ること明られし。

### 欽宗皇帝靖康元年丙午

師三十八歳。居天寧記室、分座訓徒。按圓悟拳師立僧上堂曰、鶴兒未出窠、已有摩霄志。虎子未絕」(19 b) 乳、已有食牛氣。況復羽翼成、況復爪牙備。奮迅即驚羣、八面清風起。一條脊梁、硬似鐵、一條白棒、掀天地。相与建法幢、

展衲僧巴鼻。按祭圓悟文云、某、宣和末、謁無尽居士於渚宮。是時年盛氣銳、眼高四海、公不惜推轂之力、寅緣幸会。始獲投足於汴都天寧之室、咨決大事。会陞堂拳諸仏出身處、薰風自南來之句、渙然冰釀。尋以古今商確、有句無句、晨鍛夕煉、了無凝滯。蒙於稠人中指令分座、有相與建法幢之語。七会錄以相與建法幢為雲居上堂非也。一日、徐師川同圓悟、至寮見圓悟頂相。師川指云、這老漢脚跟未点地在。師謂師川曰、甕裏何曾失却鼈。師川云、且喜」(20 a) 老漢脚跟点地。師云、莫誣佗好。一日圓悟問曰、拋虎頭、收虎尾。第一句下、明宗旨、如何是第一句。對云、此是第二句。又問、巖頭跨德山門便問、是凡是聖。德山便喝、作麼生。對云、殺人須是殺人刀、活人須是活人劍。四月、賜紫衣。師号。按塔銘曰、師於有句無句言下、得大安樂法。縱橫踔厲、無所疑於心。大肆其說。如蘇・張之雄弁、孫・吳之用兵、如建瓴水、転圜石於千仞之阪。諸老歛衽<sup>③</sup>、莫敢當其鋒。于時士大夫爭與之遊。雅為右丞相呂公舜徒所重、奏賜紫衣。師号弘日大師。時女真之肆驕、取禪師十數。師為首選。圓悟遣惇上人侍行。有西竺密三藏」(20 b) 俱館金明池上。日與論義、密深敬服。虜酋壯師不少屈。由是一衆獲免其行。師於是年八月、出京。按呂居仁送惇上人、之雲居省師詩曰、果公昔踏胡馬塵。城中草木凍不春。胡兒却立不敢問。其誰從者惇上人。袖手歸來兩無語。而今且向江西住。雲居老人費精神。送往

高安灘頭去。

①商 $\parallel$ 商 $\textcircled{乙}$ 。②横 $\parallel$ 横 $\textcircled{乙}$ 。③枉 $\parallel$ 枉 $\textcircled{甲}$

欽宗皇帝靖康元（一一二六）年丙午。

師、三十八歳。天寧の記室に居し、座を分つて、徒を訓く。圓悟、師を挙げて立僧せしむる上堂を按するに曰く、「鶴児、未だ窠を出でざるに、已に摩霄の志有り。虎子、未だ乳を絶たざるに、已に牛を食するの氣有り。況んや復た爪牙、備るをや。奪迅すれば、即ち羣を驚かし、八面清風、起る。一条の脊梁、硬きこと鉄に似たり。一条の白棒、天地を掀げる。相い与に法幢を建て、衲僧の巴鼻を展ぶ」。圓悟を祭る文を按するに云く、「某、宣和の末、無尽居士に渚宮に謁す。是の時、年盛んに氣鋭し、眼、四海に高く、公、推轂の力を惜まず、寅縁、幸会す。始め足を汴都の天寧の室に投げることを獲、大事を否決す。陞堂に会し、諸仏出身の處、薰風、南より来るの句を挙し、渙然として、氷の如くに釈く。尋いで古今の商確、有句無句を以つて、晨鍛夕煉す。了に凝滯無し。稠人の中に指して座を分たしむるを蒙り、相い与に法幢を建つるの語有り」。へ七会の録、相い与に法幢を建つるを以て、雲居の上堂と為すは非なり。」、「一日、徐師川、圓悟と同じ寮に至り、圓悟の頂相を見る。師川、指して云く、『這の老漢、脚跟、未だ地に点せざる在り』。師、師川に謂いて曰く、『甕裏、何ぞ曾つて籠を失却せん』。師川云く、『且喜すらくは、老漢の脚跟、地に点す』。師云く、『佗を謗すること莫くんば好し』。」、「一日、圓悟問うて曰く、『虎頭に抛りて、虎尾を收む。第一句の下に宗旨を明らかにする。如何なるか是れ第一句』。対えて

云く、『此は是れ第二句』。又、問う、『巖頭、徳山の門に跨いで便ち問う、是れ凡か、是れ聖か、と。徳山、便ち喝すと。作麼生』。対えて云く、『殺人は須是く殺人刀なるべし。活人は須是く活人剣なるべし』。四月、紫衣・師号を賜わる。塔銘を按するに曰く、「師、有句無句の言下に、大安樂の法を得たり。縱横踔厲して、心に疑する所無し。大いに其の説を肆 $\textcircled{甲}$ にす。蘇・張が雄弁、孫・吳の兵を用いるが如く、領水を建すこと、圓石を千仞の阪に転ずるが如く、諸老、枉を歎めて、敢えて其の鋒に当ること莫し。時に士大夫、争か之と遊ばん。雅より右丞相呂公舜の徒の為に重ぜられ、奏して、紫衣と師号の仏日大師とを賜わる。時に女眞の肆驕にて、禪師の十数を取る。師、首選と為る』。圓悟、惇上人を侍行に遣る。西竺の密三藏と云うもの有り。俱に金明池上に館す。日与に論義して、密、深く敬服す。虜脅、師の少屈せざるを壯す。是により、一衆、其の行を免ることを獲。師、是の年の八月に京を出ず。呂居仁、惇上人の雲居に之きて師を省ねるを送る詩を按するに曰く、「昊公、昔、胡馬の塵を踏む。城中の草木、凍つて春ならず。胡兒、却つて立つ、敢えて問わず。其れ誰か従者の惇上人、手を袖いて帰来す、両り語る無し。而今、且く江西に向つて住す。雲居老人、精神を費す。送りて高安灘頭に往きて去る』。

高宗皇帝建炎元年丁未

師三十九歳。居楊州天寧。十月同琳普明、渡江省侍圓悟于金山。信宿而別偕隆藏主、之吳門。少憩寶華、次虎丘。遂

館于前資。按武庫曰、圓通秀禪師云、雪下有三種僧。余、丁未冬、在虎丘、親見之、不覺」(21a)失笑。乃知前輩語不虛耳。

高宗皇帝建炎元(一一二七)年丁未。

師、三十九歲。楊州の天寧に居す。十月、琳普明と同じく、江を渡つて、圓悟に金山に省侍して、信宿して別れて、隆藏主と偕に、吳門に之く。少らく宝華に憩い、虎丘に次る。遂に前資に館す。武庫を按するに曰く、「圓通秀禪師云く、『雪下に三種の僧有り』。余、丁未(一一二七)の冬、虎丘に在り。親しく之を見、覚えず失笑す。乃ち知りぬ、前輩の語、虚ならざることを」。

二年戊申

師四十歲。居虎丘。按為錢子虛普說曰、余昔請益、湛堂殃崛摩羅持仏語、救產難因縁。湛堂雖設方便、余實不曉。後因在虎丘、看華嚴經、至菩薩登第七地、証無生法忍云、仏子菩薩成就此忍、即時得入菩薩第八不動地、為深行菩薩。難可知無差別。離一切相・一切想・一切執著、無量無邊一切聲聞・辟支仏、所不能及。離諸喧諍、寂滅現前。譬如比丘具足神通、得心自在、次第乃至入滅尽定、一切動心、憶想分別、悉皆止息。此菩薩摩訶薩、亦復如是」(21b)住不動地、即捨一切功用行、得無功用法。身口意業念、務皆息住於報行。譬如有人夢中見身墮在大河、為欲渡故、發大勇猛、施大方便、以大勇猛、施方便故、即便寤寤、既寤寤

已、所作皆息。菩薩亦尔。見衆生身、在四流中、為救度故、發大勇猛、起大精進、以勇猛・精進故、至此不動地。既至此已、一切功用、靡不皆息。二行相行、皆不現前。此菩薩摩訶薩、菩薩心・仏心・菩提心・涅槃心、尚不現起。況復起於世間之心。師云、到這裏打失布袋。湛堂為我說底方便、忽然現前。十月、省觀圓悟於雲居。道由金陵訪韓子蒼待制、留五宿而別。泛舟泝流、以抵星渚」(22a)至山次日、入首座寮。按子蒼答師書云、邂逅金陵、雖適我願、然始不謂。遽往廬山、故對牀夜談、不過四五。自離岸至今、不聞消息。極以憂懸。得書乃知、到山旬日、道路安穩。又知、便首衆僧、與老和尚、分座說法。良深慰喜。昨煩作覺範行狀、及出世入寂月日、欲為作一銘、託同安入石、切不可緩也。秉弘略曰、東門昔日呈家醜、拈出無邊栗棘蓬。今日歐峯孤頂上、幸然無事又相逢即且置。其中事作麼生。若有道得、便請歸堂。若道不得、打葛藤、謾你諸人去也。云云、會中時多童象。以圓悟久虛座元、俟師之來。頗有不平之心、一聞提唱、無不服屈。及」(22b)冬至秉弘、昭覺元禪師、出衆問、眉間挂劍時如何。師云、血濺梵天。圓悟時於座下、以手約云、住住問得極好、答得更奇。元乃歸衆。叢林由是改觀。

二(一一二八)年戊申。

師、四十歲。虎丘に居す。錢子虛の為の普說を按するに曰く、

「余、昔、湛堂に殃崛摩羅の仏語を持して産難を救う因縁を請益す。湛堂、方便を設くと雖も、余、實に曉めず。後に因みに虎丘に在りて、華嚴經を見て、菩薩の第七地に登つて、無生法忍を証すると云うに至つて云く、『仏子菩薩、此の忍を成就して、即時に菩薩の第八不動地に入ることを得るを、深行の菩薩と為す。差別無きを知るべきこと難し。一切の相・一切の想・一切の執着を離るれば、無量無邊の一切の声聞・辟支仏の及ぶこと能わざる所なり。諸の喧諍を離れて、寂滅現前す。譬えば比丘の神通を具足し、心自在を得、次第に乃至、滅尽定に入つて、一切の動心、憶想分別、悉く皆、止息するが如し。此の菩薩摩訶薩も亦復た是の如し。不動地に住して、即ち一切の功用の行を捨て、無功用の法を得、身口意業の念、務めて皆、息んで報行に住す。譬えば人有りて夢の中に身の大河に墮在するを見て、渡さんと欲するが為の故に、大勇猛を発し、大方便を施す。大勇猛を以つて、方便を施すが故に、即便ち寤寤す。既に寤寤し已れば、所作皆な息むが如し。菩薩も亦た尔り。衆生の身、四流の中にあるを見て、救度せんが為の故に、大勇猛を發し、大精進を起す。勇猛・精進を以つての故に、此の不動地に至る。既に此に至り已れば、一切の功用、皆、息まずと云うことを靡し。二行相行、皆、現前せず。此の菩薩摩訶薩も、菩薩心・仏心・菩提心・涅槃心、尚お現起せず。況んや復た世間の心を起さんや』。師云く、『這裏に到つて、布袋を打失す』。湛堂、我が為に説く底の方便、忽然として現前す』。十月、圓悟を雲居に省観す。道、金陵に由り、韓子蒼待制を訪い、留ること五宿して別る。泛舟、流に泝つて、以つて星渚に抵る。山に至る

次の日、首座寮に入る。子蒼、師に答える書を按するに云く、「金陵に邂逅して、我が願いに適うと雖も、然るに始めて謂ならず。遽に廬山に往く。故に牀を對して夜談、四五に過ぎず。岸を離れてより今に至るまで、消息を聞かず。極めて以つて憂い懸る。書を得て乃ち知る、山に到る旬日、道路、安穩なることを。又、知る、便ち衆僧に首となり、老和尚と座を分つて説法することを。良に深く慰喜す。昨に煩しく覺範の行状を作し、出世入寂の月日に及び、為に一銘を作し、同安に託して石に入らんと欲す。切に緩なるべからず』。秉私<sup>\*</sup>の略に曰く、「夷門、昔日、家醜を呈す。無邊の栗棘蓬を拈出す。今日欧峰、孤頂上。幸然として無事に又、相い逢うことは即ち且く置く。其中の事、作麼生。若し道い得ること有らば、便ち請うて堂に帰る。若し道い得ずんば、葛藤をして你諸人を謾じ去らん。△云云▽』。会中、時に竜象多し。圓悟、久しう座元を虚しくするを以つて、師の来るを俟つ。頗る不平の心有るも、一び提唱を聞いて、屈服せざると云うこと無し。「冬至の秉私に及んで、昭覺元禪師、衆を出でて問う。『眉間に剣を挂く時如何』。師云く、『血、梵天に濺ぐ』。圓悟、時に座下に於て、手を以つて約して云く、『住住、問得て極めて好し、答得て更に奇なり』。元、乃ち衆に歸る』。叢林、是に由りて觀を改む。

## 三年己酉

師四十一歳。雲居首座寮。一日、因遣火燒却簾。次日、告香拈狗子無仞性話云、欲識仞性義、當觀時節因縁。雲門大師道、若是得底人、道火何曾燒著口。遂作頌云、趙州狗子

無仏性。道火何曾口被燒。昨夜忽然簾上発。南海波斯鼻孔焦。時圓悟有歸蜀意。師於中夏、遣參徒、於雲居山後、尋得古雲門旧址、欲剗菴以居。按圓悟與耿竜學書云、果仏日、「<sup>(23a)</sup>一夏遣參徒、踏逐山後古雲門高頂、欲誅茅隱遁。其志可尚。今令謙去、山叟為書數語及疏頭。亦欲輟長財成之。可取一觀。渠正欲奉鋤、更在高裁。也圓悟、是年閏八月、退雲居。復示師住菴法語云、古德住山、率刀耕火種、不蓄長物、蕭然布衲麤衣爛食、將大有為。也慕義學道、兄弟相從、一切以寬量大度、包納之。不暴怒、不峻阻。慈・悲・喜・捨、以身帥之。蓋菴居五七間、不比叢林寬廣。咳唾動靜、無不與耳目相接。若一一責之以禮、則久久生怨、驀地顏色相及、便見參商、即攬道義。豈不見、藥山數十年、牛欄菴、只七八人。其後皆為大法器。風穴和尚、単」<sup>(23b)</sup>丁久之。只二三相從。後來麟象駢集、答問汪洋。謂之衆吼。鴻山十年、煮橡栗喫、晚年大安來者、著五百衆。大梅入深山幽谷、初不與世接。因塩官僧、採拄杖、乃逢之、問酬徑截、後半千人。既不得已、作避世隱遁。正欲韜晦、俟時清平、然後行己之願。豈可以小忍、而亂大謀哉。一切但低細和合、先防自犯三業、提向上那一著子、教兄弟日有趣向、自然忘倦、向前去也。俗諺所謂、相見易得好、共住難為人。要須廓落寬容、半見半不見、且因長久。斷與常流異矣。教中道、如為一人、衆多亦然。三家

村裏、數間茅屋、立成箇本分規繩。不嚴不緩、凡百折衷、佗」<sup>(24a)</sup>日便更多多益辦也。古人佩韋佩絃、各攻其偏。惟務中道而行。況弁智過人、不能照此細務。但患逞俊太過、一色便自性、久之便不好耳。此去有人議論、應當回転著。亦令讚歎非常人所可及乃善。更有一箇急要最後句。不免略說之。仏法無多子、久長難得人。

①商 || 商原(2)

三(一一二九)年己酉。

師、四十一歳。雲居の首座寮にあり。「<sup>\*</sup>」日、遺火に囚りて、簾を焼却す。次日、告香して狗子無仏性の話を拈じて云く、「仏性の義を識らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。雲門大師道う、若是し得る底の人ならば、火と道うも、何ぞ曾つて口を燒著せん、と。遂に頌を作して云く、『趙州狗子、無仏性。火と道うも、何ぞ曾つて口燒かる。昨夜、忽然として、簾上に発す。南海の波斯、鼻孔焦る』。時に圓悟、蜀に帰る意有り。<sup>\*</sup>師、中夏に、參徒を遣り、雲居山の後に、古雲門の旧址を尋ね得て、菴を剗めて以つて居せんと欲う。圓悟、耿竜學に与える書を按するに云く、「果仏日、一夏、參徒を遣わして、山後の古雲門の高頂を踏逐して、茅を誅りて隱遁せんと欲う。其の志、尚ぶべし。今、謙をして去かしめ、山叟、為に數語及び疏頭を書す。亦た長財を輒めて、之を成さしめんと欲す。取つて一觀すべし。渠、正に奉鋤せんと欲す、更に高裁に在り」。圓悟、是の年、閏八月、雲居に退く。<sup>\*</sup>復た師の住菴の法語を示して云く、「古德の住山、率むね刀耕火種して、長物を蓄えず。

蕭然たる布衲麤衣、櫛食して將に大いに為すこと有らんとす。也た義を慕い道を学する兄弟、相い従わば、一切に寛量の大度を以つて、之を包納せよ。暴怒ならざれ、峻阻ならざれ。慈・悲・喜・捨、身を以つて之を帥いよ。蓋し菴居五七間、叢林の寛広を比せず。咳唾動静、耳目と相い接らずと云うこと無し。若し一一に之を責るに礼を以つてせば、則ち久久に怨を生じて、薦地に顏色相い及び、便ち參商を見て、即ち道義を攬す。豈に見ずや、<sup>\*</sup>薦山数十年、牛欄菴に只だ七八人なり。其の後、皆大法器と為る。風穴和尚、単丁なること久し。只だ二三相い従がう。後來、麟象駢集し、答問汪洋たり。之を衆吼と謂う。

<sup>\*</sup>鴻山十年、橡栗を煮て喫す。晩年に大安来る者、五百衆を著わす。大梅、深山幽谷に入り、初め世と接せず。因みに塙官の僧、拄杖を採つて、乃ち之に逢うに、問酬徑截にして、後に半千人なり。今、既に己むを得ずして、世を避け隱遁を作す。正に韜晦して時の清平を俟つて、然して後に己が願いを行わんと欲す。豈に小忍を以つて大謀を乱るべけんや。一切但だ低細和合して、先ず自ら三業を犯すことを防ぎ、向上の那一著子を提げて、兄弟をして、日に趣向有らしめよ。自然に倦むことを忘れて、向前し去らん。俗の諺の所謂る、相い見ては好みを得易し、共に住しては、人の為にし難し、と。要す須く廓落寛容に、半見半不見にして、且つ長久を図るべし。断と常と流れ異ならん。教中に道う、『一人の為にするが如く、衆、多くも亦然り』。三家村裏の数間の茅屋に立てて箇の本分の規繩を成せ。嚴ならず、緩ならず。凡そ百、折衷せば、佗日、便ち更に多多にして、益ます辦すべし。古人、韋を佩び絃を佩びて、各

おの其の偏を攻む。惟だ中道にして行ぜんことを務むべし。況んや弁智、人に過ぎて、此の細務を照すと能わざるをや。但だ患わしく俊を這しうすること太過にして、一色便ち自性にして、久しうして便ち好まざらんことを。此を去るとき、人有りて議論せば、応當に著を回転せしむべし。亦た常の人及ぶべき所に非ざるを讚歎せしめば、乃ち善からん。更に一箇の急要の最後の句有り。之を略説することを免れざれ。仏法、多子無し、久長に人を得ること難し』。

#### 四年庚戌

師四十二歳。是年春、遷海昏雲門菴。時開善謙・薦福本・東林顔・雪峯空、凡二十餘人、侍師而往、朝參暮請、声誉藪著。九月、以盜賊猖獗、避地湖湘。抵長沙、訪仏性泰禪師於谷山。師与之雖法門昆季、而<sup>(24b)</sup>未之識、一見果合符契。商今確古、語必終日、坐必達旦。仏性喜楊岐正宗有賴於師。特揭振祖堂以館之。一日師曰、香嚴悟道頌、一擊忘所知五字、曲尽其妙、後七句皆注脚耳。仏性曰、五祖師翁、頌狗子無仞性、只消趙州露刃劍足矣。余皆剩語。二人欣慰、各以為然。邊境既肅。遂作江西之行。按子蒼寄圜悟書云、妙喜菴于雲門、方成法席、以賊近境、散去。近來豐城相見云、過谷山見泰老、甚安穩也。

#### 四（一一三〇）年庚戌

師、四十二歳。<sup>\*</sup>是年の春、海昏の雲門菴に遷る。時に開善謙・薦福本・東林顔・雪峰空、凡そ二十餘人、師に侍して往き

て、朝参暮請、声誉藹著す。九月、盜賊猖獗を以つて、湖湘に避地す。長沙に抵り、<sup>\*</sup>仏性泰禪師を谷山に訪う。師、之と法門の昆季と雖も、未だ之と識らず、一見して果して符契に合す。

今を商り、古を確め、語れば必ず日を終え、坐すれば必ず旦に達る。仏性、楊岐の正宗、師に頼ること有るを喜こぶ。特に祖堂を掲振して、以つて之に館す。一日、師曰く、「香巖悟道の頌、一擊、所知を忘ずの五字、曲に其の妙を尽す。後の七句、皆な注脚のみ」。仏性曰く、「五祖師翁、狗子無仏性を頌すに、只だ趙州、露刃劍を消いば足れり。余は皆、剩語なり」。一人、欣慰して各おの以つて然りと為す。辺境、既に肅かなり。遂に江西の行を作す。子蒼、圓悟に寄する書を按するに云く、「妙喜、雲門に菴す。方に法席を成すに、賊の境に近づくを以つて、散じ去る。近來、豊城に相見して云く、『谷山を過ぎて、泰老に見ゆ。甚だ安隱なり』」。

### 紹興元年辛亥

師四十三歳。登仰山、邂逅東林珪禪師。按東林跋頌古云、余靖康元年、結茅分寧西峯。建炎四年、遷<sup>(25a)</sup>仰山。明年、妙喜、自湖外来、一見相契。遂定楊岐宗旨。二月、復還雲門菴。題高菴悟禪師語要。示學徒雲門举起竹箆五頌。

紹興元(一一三一)年辛亥。

師、四十三歳。仰山に登り、東林珪禪師に邂逅す。<sup>\*</sup>東林の頌古を跋するを按するに云く、「余、靖康元(一一二六)年、茅を分寧の西峰に結ぶ。建炎四(一一三〇)年、仰山に遷る。明年、妙喜、湖外より來り、一見して相い契う。遂に楊岐の宗旨

を定む」。二月、復た雲門菴に還る。高菴悟禪師の語要に題す。<sup>\*</sup>学徒に雲門の竹箆を擧起する五頌を示す。

### 二年壬子

師四十四歳。深山闐寂所処、皆正因学道之士。而師不倦椎払、日夕与之鍛煉。一日為衆曰、此事人人具足、各各圓成。只向自己分上辨取。世尊初生下、一手指天、一手指地、周行七步、目顧四方云、天上天下、唯我獨尊。意在那裏、意在鉤頭。只要各自知独尊。只如長慶稜和尚、悟道了有頌云、万象之中、独露身。唯人自肯乃方親。昔年謬向塗中覓<sup>(25b)</sup>。今日看来火裏冰、這箇須是自肯始得。我說底尽是塗中事。去禪牀角頭覓。說仏說法、說妙說玄、事理心性、尽塗中事。且那箇是独露底身。大丈夫漢、須是自肯始得。那裏去古人舌頭上覓。纔見人道是、你也道是、道不是、你也道不是。只在声色上走、有什麼交涉。又曰、今時人尽是順顛倒、不順正理。如何是仏、即汝心是、却以為尋常。及至問如何是仏、答云、燈籠沿壁上天台。便道奇特。豈不顛倒耶。又曰、我這裏禪如擊石火、當一擊時、拈起法燭、點著便行、纔眨眼便蹉過也。這些子、不妨是難。又曰、兄弟做工夫不消拏因縁。只去近處看。只如六<sup>(26a)</sup>。祖為明上座云、汝但善惡都莫思量。當恁麼時、一切不思量、還我明上座本来面目。但恁麼看。又曰、此事大段近。因甚不會。良久曰、只為分明極、翻令所得遲。

①辨<sup>ハ</sup>弁<sup>ヲ</sup>。②性尽<sup>ハ</sup>尽性<sup>ヲ</sup>。③當<sup>ハ</sup>常<sup>ヲ</sup>

二(一一三二)年壬子。

師、四十四歳。<sup>\*</sup>深山閑寂<sup>ばきじやく</sup>の所処にして、皆、正因学道の士なり。師、椎払に倦まず、日夕、之と鍛煉す。一日、衆の為に曰く、「此の事、人人具足し、各各圓成す。只だ自己の分上に向つて辨取せよ。世尊、初めて生下して、一手は天を指し、一手は地を指して、周行七歩し、目、四方を顧みて云く、『天上天下、唯我獨尊』。意、那裏にか在る。意、鉤頭に在る。只だ要

す、各各自ら獨尊と知れ。只如<sup>たとえ</sup>ば長慶稜和尚、悟道し了つて、頌有りて云く、『万象の中、獨露身』。唯だ人自ら肯つて乃ち方<sup>ほう</sup>めで親し。昔年、謬<sup>まち</sup>つて塗中に向つて覗む。今日、看來れば、火裏の冰。這箇は須是<sup>すべから</sup>く自ら肯つて始めて得し。我れ説く底、尽く是れ塗中の事、禪牀角頭に去りて覗む。仏と説き、法と説き、妙と説き、玄を説く、事理の心性、尽く是れ塗中の事。且く那箇か是れ獨露底の身。大丈夫の漢、須是<sup>すべから</sup>く自ら肯つて始めて得し。那裏に古人の舌頭上に去りて覗む。纔に人の是と道うことを見ては、你も也た是と道い、不是と道うを、你も也た不是と道う。只だ声色の上に走る。什麼の交渉か有らん」。又、曰く、「今時の人、尽く是れ顛倒に順つて、正理に順わず。如何なるか是れ仏。即ち汝が心是なり。却つて以つて尋常と為す。如何なるか是れ仏と問うに至るに及んで、答えて云く、燈籠、壁に沿うて天台に上る、と。便ち道う、奇特、と。豈に顛倒せざらんや」。又、曰く、「我が這裏の禪は、擊石火の如く、一撃の時に当つて、法燭を拈起して、点著すれば便ち蹉過す。這の些子、妨げざれば是れ難に眼を<sup>まばた</sup>きすれば便ち蹉過す。這の些子、妨げざれば是れ難

### 三年癸丑

師四十五歳。東林珪禪師、自仰山來、同居。各作頌古一百

十篇。按東林書頌古後云、紹興癸丑四月、余過雲門菴、同妙喜度夏。山頂高寒、終日無一事。相從甚樂。妙喜曰、昔白雲端師翁、謝事圓通、約保寧勇禪師、夏居白蓮峯、作頌古一百十篇、有提尽古人未到處、從頭一一加針錐之語。吾二人<sup>(26 b)</sup>今亦同夏於此、事跡相類、雖微齋無媿也、遂取古公案、一百二十則、各為之頌、更<sup>ハ</sup>互酬酢、發明蘊奧。斟酌古人之深淺、譏訶近世之謬妄。不開知見戶牖、不涉語言蹊徑、各隨機緣、直指要津。庶有志參玄之士、可以洗心易慮於茲矣。臨川太守曾公紓、以廣壽虛席、請師莫之肯就。而師堅志莫屈。按子蒼書云、昨顏知藏、歸附書奉勸。以彼太閑寂山下、時有劫掠、似非禪定之所、不若與衆來此。或須卓庵極易事耳。不知何故了不見聽。今郡守欽仰道德、且采衆論、特屈公高躅、說法廣壽。不肖<sup>(27 a)</sup>語之

し。又、曰く、「兄弟、工夫を做すに、因縁を擧することを消い<sup>し</sup>ず。只だ近處に去きて看よ。只如<sup>たとえ</sup>ば六組、明上座の為に云く、『汝、但だ善惡、都て思量すること莫れ。恁麼の時に当つて、一切、思量せざれ。我に明上座が本来の面目を還す。但だ恁麼に看よ』。又、曰く、「此の事、大段近し。甚に因つてか会せざる。良久して曰く、『只だ分明に極むが為なり。翻<sup>かえ</sup>つて所得をして遙からしむ』。

曰、此公誓不出世、雖堅請必不来。然自聞議定、一方道俗、無不延跋。昔汾陽累請不出、後来自要住院。乃知通人或出或處。豈嘗固執。況今禪道頽壞。所以圓悟望公振起楊岐之風。若孤峯頂上、草衣木食、終不為人。此則獨覺行也。豈圓悟之意哉。九月、同珪禪師、之臨川、訪子蒼・居仁。謁草堂和尚於踈山。因館子蒼之西齋。按普說云、子蒼為此事甚切、與某鼻孔廝挂、者半年。

①互二五②

三（一一三三）年癸丑。

師、四十五歲。東林珪禪師、仰山より来つて同居す。各おの頌古一百一十篇を作す。<sup>\*</sup>東林の頌古の後に書するを按するに云く、「紹興癸丑（一一三三）四月、余、雲門菴を過ぎ、妙喜と同じく夏を度る。山頂、高寒にして、終日、一事無し。相い従つて甚だ樂しむ。妙喜曰く、『昔、白雲端師翁、圓通に謝事して、保寧勇禪師に約して、夏、白蓮峰に居し、頌古一百一十篇を作す。古人の未だ到らざる処を提尽して、從頭より一一に針錐を加うの語有り。吾ら二人、今、亦た夏を此に同じくして、事跡に相い類し、<sup>ひそみなら</sup>に倣うと雖も、媿<sup>は</sup>すこと無し』。遂に古の公案一百一十則を取つて、各おの之に頌を為す。更に互いに酬酢して、

蘊奥を發明す。古人の深浅を斟酌して、近世の謬妄を譏訶す。

知見の戸牖を開かず、語言の蹊徑に涉らず。各おの機縁に随つて、直に要津を指す。<sup>\*</sup>庶わくは有志參玄の士、心を洗う以つて慮を茲に易うべし。臨川の太守曾公紓、廣寿の虛席を以つて、師を請うに、之を得ること莫し。遂に待制韓公子蒼、及

び舍人呂公居仁に託して、書を以つて勧諭す。庶幾わくは、肯つて就かんことを。師、志を堅くして屈すること莫し。<sup>\*</sup>子蒼の書を按するに云く、「昨に顏知藏の帰るに書を附して勧を奉す。彼の太だ闘寂を以つて、山下、時に劫掠有り、禪定の所に非ざるに似たり。若かず、衆と与に此に来るに。或は須く菴を卓て極つて事を易うべし。知らず、何故に了に聽かれざることを。今、郡守、道徳を欽仰して、且つ衆論を采り、特に公の高躅を屈して、廣寿に説法せんことを。不肖、之に語つて曰く、『此の公、誓つて出世せず。堅く請すと雖も、必ず来らず』。然るに自ら議定を聞いて、一方の道俗、延跋せざること無し。昔、汾陽、累りに請えども出でず。後來、自ら住院せんことを要す。乃ち知る、通人、或は出、或は処す。豈に嘗つて固執せんや。況んや今、禪道頽壞す。所以に圓悟、公に楊岐の風を振起せんことを望む。若し孤峰頂上に、草衣木食せば、終に人の為ならず。此れ則ち獨覺の行なり。豈に圓悟の意ならんや。九月、珪禪師と同じく臨川に之き、子蒼・居仁を訪う。<sup>\*</sup>草堂和尚に踈山に謁す。因みに子蒼が西齋に館す。普說を按するに云く、「子蒼、此の事の為に甚だ切なり。某と鼻孔廝挂すること、者の半年なり」。

四年甲寅

師四十六歳。是年二月、作七閩之行。按子蒼贈別詩、其略曰、幻世吾方夢、迷津子作舟、禪心如密付、」(27b)當為少淹留。又有還應雪峯老領衆、待雲門之句。三月至長樂、館于廣因寺。因遊雪峯、適建菩提会、真歇了禪師、請為衆

普說。其略曰、今夏在広因、開箇燈心卓角鋪子、隨分說些蠻禪。室中問一句子。不思量計較、天真自然、道得一句、便与一拶、擬議不来、劈脊一棒。別無細膩功夫。忽然打發一箇半箇。却教上來就大爐鞴、事同一家。按為超・明・海三大師普說云、尼長老妙道、号定光大師。往年在雪峯、諸處參禪。聞我在広因、遂破夏來、求挂搭。山僧向佗道、我自是客、問取長老去。長老諾之。其時只七十僧、一日兩遍入室。因為光藏主、舉話次、道、在」<sup>(28a)</sup> 外面聽得、有歡喜處。便來吐露云、適聞和尚舉不是心不是仏不是物、已理會得。當時便問佗、不是心不是仏不是物、你如何會。云、妙道、只恁麼會。道声未了、山僧云、因。多了。箇只恁麼會。渠乃贊地。林適可司法、瓶菴於洋嶼、延師居之。時宗徒撥置妙悟、使學者困於寂默。因著弁正邪說、而攻之、以救一時之弊。按示遵璞禪人法語云、甲寅春、余自江左來閩。有祥雲疊懿長老、開法蒲中、衲子輻湊。璞亦從之、為表裏。余知其未穩當、恐誤學者、以書致懿令題來、懿畏得失、遲其行。遂因小參、痛斥其非、揭榜于門、以告四衆。懿不得已、乃破夏來。詰其所」<sup>(28b)</sup> 証、只如旧時。遂語之曰、恁麼見解、何敢嗣圓悟。便退却院來、懿夏末果不食言。璞亦繼至。一日入室、余問僧、德山見僧入門、便棒。臨濟見僧入門、便喝。雪峯見僧入門、便道是什麼。睦州見僧入門、便道現成公案、放你三十棒。這四箇老漢、還

有為人處也無。僧曰、有。余曰、劄。僧擬議。余便喝出。璞聞之、從忽然脫去前許多惡知惡解。遂成箇灑灑地衲僧。懿亦相繼、於一言之下、脚踏实地。有弥光禪人、叢林号光狀元者。蓋在洋嶼、最初得法。一日入室次、師問曰、喫粥了也、洗鉢盂了也、燒香了也、行道了也、去却藥忌、道將一句來。光云、裂破。師厲聲曰、你」<sup>(29a)</sup> 又來這裏說禪也。光於言下契悟。呈頌云、當機一拶怒雷吼。驚起法身藏北斗、洪波浩渺浪滔天。拈得鼻孔失却口。師即樞鼓說偈以証云、龜毛拈得笑咍咍。一擊萬重閂鎖開。慶快平生是今日。孰云千里賺吾來。又鼎需禪人、入室。師問曰、內不放出、外不放入、正当恁麼時如何。需擬對。師以竹篦、打至三下。需忽大悟、不覺叫曰、和尚已是多也。師又打一下。乃示一偈云、頂門豎亞摩醯眼。肘後斜懸奪命符。瞎却眼奪却符。趙州東壁挂葫蘆。又大悲閑長老、年八十有四。隨衆入室。師問、不與万法為侶、是什麼人。閑曰、扶不起。師曰、扶不起是什麼人」<sup>(29b)</sup> 速道速道。閑擬對。師便打。忽然大悟。復示以頌。一棒打破生死窟。當時凡聖絕行蹤。返笑趙州心不歇。老來由自走西東。菴居纔五十三人、未五十日、得法者、十二輩。答曾天游侍郎・吳元昭提刑問道書、示祖元禪人・疊懿長老等十三頌。以頌戲了然居士鄭擧之。作珪竹菴讚。擬泉大道、作葦苴歌。送文紀道者持鉢。閩士鄭昂、早聰銳、該洽三教。粗見尊宿、所至談禪自若。

聞師力排黙照為邪、昂忿氣可掬。一日持香來、声色俱厲。

引枳迦掩室、及達磨・魯祖面壁等語、与師弁白。師曰、我只將你屋裏底、為你說。莊子曰、言而足<sup>(3)</sup>、終日言而尽道。

言而不足」(30a) 終日言而尽物。道物之極、言默不足以載。非言非默、義有所極。孔子曰、參乎、吾道一以貫之。

曾子曰、唯。此亦言而足処。但措大多錯会。肇論、枳迦掩室於摩竭。四義是皆理為神御。故口以之而默。豈曰無弁。

弁所不能言也。何得向黑山鬼窟裏坐地。先聖訶為解脫深坑。極可怖畏。蒙莊座主、尚不滯於默然。況祖師門下客、纔開口、便落今時、有甚交涉。尚明、不覺作禮。師復徵以生死

大事。乃省悟悅服。是冬、以浴司拾官夫所伐棄樹梢、燭浴。縣尉私意追擾菴隣。師即拏衣過蒲陽。憲使督尉、躬請不回。戲作偈寄檀越曰、雲門燒浴盜官柴。帶累傍人枉」(30b) 受災。寄語嶼頭諸施主。已成鮑老送燈台。

①功=工甲。②大=太甲。③④足=足則②

四(一一三四)年甲寅。

師、四十六歳。是年二月、七閩の行を作す。<sup>\*</sup>子蒼の別を贈る詩を按するに、其の略に曰く、「幻世吾が方に夢。津に迷う子、舟を作す。禪心如し密付せば、當に為に少しく淹留すべし」。又、還た雪峰老に応じて、衆を領し、雲門を待つの句有り。三月、長樂に至つて、広因寺に館す。因みに雪峰に遊び、適たま菩提会を建つ。<sup>\*</sup>真歇了禪師、請して衆が為に普説せしむ。其の略に曰く、「今夏、広因に在つて、箇の燈心卓角の鋪子を開き、

分に随つて些の龐禪を説く。室内に一句子を問う。思量計較せずして、天真自然に一句を道得すれば、便ち一拶を与え、擬議して來らざれば、膀胱に一棒す。別に細膩の功夫無し。忽然として一箇、半箇を打發す。却つて上来して大炉鞴に就かしめ、事、一家に同じ」。<sup>\*</sup>超・明・海の三大師の為の普説を按するに云く、「尼長老妙道、定光大師と号す。往年、雪峰に在つて、諸處に参禪す。我的広因に在ると聞いて、遂に夏を破り来つて挂搭を求む。山僧、佗に道く、我是是れより客なり。長老に問取しほれ。長老、之を諾す。其の時、只だ七十僧、一日に兩遍入室す。因みに光藏主の為に話を挙す<sup>ぞ</sup>次、道、外面に在りて、聴き得て、歎喜の処有り。便ち来つて吐露して云く、『適たま和尚の不是心不是仏不是物を挙げるをして、已に理会し得たり』。當時便ち佗に問う、『不是心不是仏不是物、你、如何が会す』。云く、「妙道、只だ恁麼に會す」。道が聞、未だ了らざるに、山僧云く、「因。箇の只だ恁麼に會することを多くししたると」。渠乃ち警地たり」。<sup>\*</sup>林適可司法、菴を洋嶼に瓶む。師を延いて之に居せしむ。時に宗徒、妙悟を撥置し、学者をして寂黙に困ぜしむ。因みに弁正邪説を著して之を攻め、以つて一時の弊を救う。遵璞禪人に示す法語を按するに云く、「甲寅(一一三四)の春、余江左より閩に来る。<sup>\*</sup>祥雲曇懿長老有り、法を莆中に開く。衲子輻湊す。璞、亦た之に従つて、表裏と為す。余、其の未だ穩当ならざるを知り、学者を誤るを恐れて、書を以つて懿に致して、頗る來らしむ。<sup>しばら</sup>懿、得失を畏れて、其の行を遅くす。遂に小參に因つて、其の非を痛斥し、榜を門に掲げて、以つて四衆に告ぐ。懿、已むことを得ずして、乃ち夏を破つて来る。其の

所証を詰れば、只だ旧時の如し。遂に之に語つて曰く、『恁麼の見解、何ぞ敢えて圓悟に嗣せん。便ち院を退却し来れ』。懿、夏末に果して、食言をせず。璞も亦た繼いで至る。一日、入室現成公案、你に放す三十棒。這の四箇の老漢、還つて為人の処有りや』。僧曰く、『有り』。余曰く、『剖』。僧、擬議す。余、便ち喝出す。璞、之を聞いて、忽然として從前の許多の惡知惡解を脱去す。遂に箇の灑灑地の衲僧と成る。懿も亦た相い繼いで、一言の下に於て、脚、実地を踏む』。「<sup>\*</sup>彌光禪人有り、叢林、光狀元と号す者なり。蓋し洋嶼に在りて、最初に法を得たり。」一  
日、入室の次、師問うて曰く、「喫粥し了れるや、鉢盂を洗い了れるや、燒香し了れるや、行道し了れるや。藥忌を去却して、一句を道い将ち来れ』。光云く、『裂破す』。師、声を厲して曰く、『你、又、這裏に來つて禪を説けり』。光、言下に契悟す。頌を呈して云く、「當機一拶、怒雷、吼ゆ。法身を驚起して、北斗に藏す。洪波浩渺、浪滔の天。鼻孔を拈得して、口を失却す』。師、即ち皺を樋つて偈を説いて以つて証して云く、「<sup>\*</sup>龜毛拈得して、笑い咍咍、一擊に万重の閂鎖開く。慶快平生、是れ今日。孰が云く、千里、吾を賺し来る』。」又、鼎需禪人、入室す。師、問うて曰く、「内、放出せず、外、放入せず。正当恁麼の時如何』。儒、対えんと擬す。師、竹籠を以つて打つこと三下に至る。需、忽ち大悟し、覚えず叫んで曰く、「和尚、已に是れ多し』。師、又、打つこと一下す。乃ち一偈を示して云く、

『頂門、堅に亞ぐ、摩醯が眼。肘後、斜めに懸る、奪命符。眼を瞎却し、符を奪却す。趙州東壁に葫蘆を挂く』。【又、大悲闍長老、年八十有四。衆に隨つて入室す。師問う、『万法と侶為らず、是れ什麼人ぞ』。閑曰く、『扶け起さず』。師曰く、『扶け起さず、是れ什麼人ぞ』。速かに道え、速かに道え』。閑、対えんと擬す。師便ち打す。忽然と大悟す。復た示すに頌を以つてす。』「一棒に生死の窟を打破す。當時凡聖、行蹤を絶す。返笑、趙州、心、歇ます。老來、自に由り西東に走る』。菴に居して纔に、五十三人、未だ五十日ならざるに、得法の者、十三輩。<sup>\*</sup>曾天游侍郎・吳元昭提刑に答える問道の書、<sup>\*</sup>祖元禪人・曇懿長老等に示す十三頌あり。頌を以つて了然居士鄭舉之と戯れる。<sup>\*</sup>珪竹菴の讚を作す。<sup>\*</sup>泉大道に擬して、<sup>\*</sup>葛直歌を作る。<sup>\*</sup>文紀道者の持鉢を送る。「<sup>\*</sup>閩土鄭昂、早に聰銳、三教を該洽す。粗ば尊宿に見え、至る所、禪を談すること自若たり。師の力めて黙照を排して邪と為すを聞いて、昂、忿氣して掬うべし。一日、香を持し來つて、声色、俱に厲む。釈迦、室を掩え、及び達磨・魯祖面壁等の語を引いて、師と弁白す。師曰く、我、只だ你が屋裏の底を將つて、你が為に説かん。莊子に曰く、『言ひて足りて尽く物なり。道と物との極は、言黙以つて載するに足らず。吾が道は一以つて之を貫く』。曾子曰く、『參よ、言ひて足る処なり。但だ措大多く錯会す。肇論に、『釈迦、室を摩竭に掩う』。四義是れ皆な理として神御と為す。故に、口之を以つて黙す。豈に弁無きと曰わんや。弁の言うこと能わざる

所なり。何ぞ黒山鬼窟裏に坐地を得んや。先聖訶して解脱の深坑と為す。極めて怖畏すべし。蒙莊座主、尚お默然に滯らず。況んや祖師門下の客、纔に口を開かば、便ち今時に落つ。甚の交渉か有らん。尚明、覚えず礼を作す。師、復た徵するに生死の大事を以つてす。乃ち省悟悦服す」。<sup>\*</sup>是の冬以つて浴司、官夫の伐棄する所の樹梢を拾い、燐浴す、県の尉、私意に菴の隣を追擾す。師、即ち衣を払つて、蒲陽を過ぐ。憲使督尉、躬ら請すれども回らず。戯れに偈を作して、檀越に寄せて曰く、「雲門、浴を焼くに、官柴を盜む、傍人を帶累して、狂しく災を受く。語を寄す嶼頭、諸の施主。已に成つて鮑老、燈台を送る」。

(つづく)